

上地の風 (第六号)

続々ふるさと上地

岡崎市立上地小学校

上地の風(第六号)

続々・ふるさと上地

岡崎市立上地小学校

はじめに

本校が岡崎市南部の区画整理地帯に誕生して、七周年を迎えます。全国各地から、保護者の皆さんが、この上地の地を選び、第二のふるさととしての生活を営んでおられます。

上地の山々を切り開いて生まれた学区であり、開校後歴史の浅い学校であります。このような理由もあって、学区内の古い歴史や文化が、どのような歩みで今日に至ったか、十分に分からないままになっていました。

そこで、本年も微力ではありますが、本校職員や学区の先輩各位の手で、区内の歩みや貴重な伝統を調査してまいりました。まだまだ、始まったばかりです。学区の皆様のご協力を頂きながら、これからも調査、発掘を続けていきたいと思えます。

また、併せて学校の様子なども記録として載せてありますので、お読みいただき、ご感想などお寄せいただければ幸いです。

終わりに、この冊子を作成するにあたり、ご協力いただきました関係の方々に厚くお礼を申しあげます。

平成元年三月

岡崎市立上地小学校長 嶋田 稔
同 PTA会長 近藤 則康

目次

はじめに

一、ふるさとシリーズ

- 一、温かな家庭や地域こそ人間を育てる 1
- 二、上地学区の過去・現在・未来を語る 8
- 三、初夏の大谷公園 16
- 四、上地にも空襲 26
- 五、上地を通った塩の道 31
- 六、上地の山にきのこがいっぱい 33
- 七、『キツネのちょうちん』（上地のむかし話） 37
- 八、季節を知らせる街路樹 41
- 九、藤六のお地藏さんを訪ねて 43
- 十、山や田畑ばかりだった上地学区 53
- 十一、『上地の馬かけ』（創作童話） 63
- 十二、春を待つ植物 66
- 十三、大谷公園へ野鳥ウォッチング 76

二、校長通信

- 一、朝の路上で 86

- 二、うれしい話題二つ 92
- 三、待望の校舎増築始まる 96
- 四、調べる子供たち 97
- 五、励ましあう子供たち 99
- 六、「なかよし池」からのレポート 100
- 七、コイもカメも元気です 103
- 八、内装工事はじまる 105
- 九、心やさしき上地っ子 108
- 十、ご好意に感謝します 110
- 十一、音のプレゼント 112
- 十二、平成元年度十大ニュース 114

三、教室の窓

- 一、大きな目を開けて歌おう 116
- 二、アンテナをのぼそう 118
- 三、人の心の温かさに触れて 120
- 四、大成功！新ジャガたっぶりの特製カレー 122
- 五、一粒のお米をきっかけにして 125
- 六、『ドロシーの冒険』を通して 127
- 七、石ころの学習 131
- 八、紙袋で変身して「パーティをしよう」 133
- 九、学芸会の魅力ってすごい 135
- 十、やればできるぞ！六四二回 138

十一、四十五才からの出発……………144

十二、クラスの思い出ベストテン……………142

四、学校ニュース

一、リングトンネルが完成……………146

二、こんにちは お光さん……………147

三、「生き生き学習」をテーマに実践報告会……………148

四、上地っ子の願を込めて七夕集会……………157

五、統計グラフコンクールで市長賞・部会賞……………159

六、女子バレー部公式戦最後を優勝で飾る……………163

七、なかよし池に流水装置……………166

八、ベルマークが竹馬に……………169

九、ソニー教育論文で優良賞を受賞……………170

十、文化祭のテーマは「あの子どこの子上地っ子」……………171

十一、校舎増築を盛大に祝う……………176

十二、健脚競う馬拉ソン大会……………178

十三、中庭の築山は人の山……………179

十四、学校給食試食会に四十五名の参加……………180

五、寄稿

一、よもぎ寿司……………186

二、子育ての絵本作り……………189

三、実践報告会に参加して……………191

四、アメリカ生活の思い出……………193

五、心なごむ草花への水かけ……………196

六、詩「わすれもの」……………198

七、いい笑顔……………199

八、現代っ子の病気は……………201

九、上地の十年前……………203

十、年の瀬に思う……………204

十一、青少年団体と父兄……………207

十二、「あいうえお」を実践……………209

十三、P T A 活動を通して……………210

おわりに

我が国の東部地方に於ては、

一、ふるさとシリーズ

一、温かな家庭や地域こそ人間を育てる

（前岡崎医療刑務所長の房宗秀夫さんを訪ねて）



今春退官の房宗さん

岡崎医療刑務所長を十四年間務めた房宗秀夫さん（六五）は岡崎市若松東二が今春、同刑務所を定年退官した。終戦直後の混乱期に医師として広島県の刑務所を振り出しに、受刑者の医療一筋に歩んで四十年。陸軍短期軍医候補生だった房宗さんは昭和二十一年、満州から復員。家が焼失していたため「官舎に住めるから」と広島県の尾道刑務所へ就職した。その後、長崎刑務所、多摩少年院と転任して八王子医療刑務所へ。更に、名古屋刑務所を経て五十年から岡崎医療刑務所長。同刑務所は全国で二か所しかない精神病患者・精薄者の治療処遇専門刑務所で、外科医の房宗さんは当初戸惑うことばかりだった。

これは、四月七日付毎日新聞報道記事の一節です。昨年九月号の学校だよりで「岡崎医療刑務所を訪ねて」と題し、「ふるさとシリーズ」としても紹介させて頂きました。その折に、房宗所長さんがこんなことを言われたのを思い出します。「受刑者が刑期を終えて社会復帰した後、再犯を起ささないことを切望しています。」

温かなお人柄に接し、いつかまたゆっくりお話を聞かせて頂きたいと思っていました。ご多忙な毎日をお察しして、退官される今日まで延ばしてしまいました。こんな訳で、去る四月十二日の午後、嶋田校長先生、加藤事務主査さんと一緒に、若松東二二十一八のご自宅を訪ねました。

六十五才とはとても思えない、元氣はつらつのご様子だ」さすが医師「と驚きました。

「今後は、篤志面接員として刑務所を訪問、受刑者の相談に乗り、更生の手助けに努めたい。」

「ぜひとも長くお続け下さい。私たち、学校教育にもお力を下されば幸いです。」

校長先生との打ち解けた会話が続いた後で、約二時間半に及ぶ、インタビューが始まりました。庭の木々が夕日を浴びて映え、そこに雀がやって来ます。落ちついた雰囲気の中で会話がはずんでいきました。以下、その中から、いくつかのテーマに絞ってご紹介してみたいと思います。

〔一〕 受刑者の立ち直りを信じて

〜矯正医療の本道を求めて歩む〜

岡崎医療刑務所では主として精神病・精神薄弱・精神病質と診断された受刑者を収容しています。いずれも、精神障害を負って犯した罪により刑に服しているわけです。その数、約二百二十名ということです。

「一般の人たちに比べて大きなハンディを背負っているとはいえ、犯罪をしたことには違いありません。被収容者の生い立ちや知能の低さなどを見ると、これでは、お寺の賽銭を失敬してしまうのはやむを得ないのではと、変に納得してしまうような事例もあります。しかし、やはりここは精神病院ではなく刑務所なのです。ですから、何と言っても犯罪者を拘禁することが第一の目的です。問題は、こうした社会的な制裁・刑罰を科すことの他に何をすべきかということなのです。不治に近い精神の障害をもっている被収容者に対して少しでも、それにふさわしい医療を施し、社会復帰できるようにしたいと私たちは日夜努力を続けているのです。」

こうした受刑者の健全な社会復帰に寄せる房宗さんの熱情はついに、日本の一般刑務所内医療の場において行刑史上最初の看護婦採用を成し遂げられたのです。

「一般の医療の場では医者と看護婦というごく当然の組み合わせが、刑務所という特殊な施設内医療ではナースを異性としてとらえることが異常に強く、看護婦の採用には踏み切れなかったのです。昭和二十六年医療刑務所発足当時の看護婦さん達には、被収容者への生半可な愛情は禁物とされていました。患者との言葉によるふれあいは全く許されず、『お大事に』などの言葉すら禁句とされていた時代があったのです。しかし、被収容者と言えども、病いに苦しむ患者なのです。人の心のぬくもりを感じることをなくして決して本来の精神的健康を取り戻すことはできません。いわんや、精神の障害をかかえた患者ですから、白衣の看護婦さんの愛情がどんなに大きく響くか分かりません。名古屋刑務所で昭和四十七年、定年退官した看護士の後任としてやっとの思いで看護婦さんを採用できたことが忘れられません。」

矯正医療史上に残る快挙を語る房宗さんの顔がほころびました。患者でもある受刑者に可能な限りの医療を施し、愛情に飢えた彼らに温かい手を差し伸べるこの意味を熱っぽく語られます。

〔二〕 所内の「運動会」「や」「上地焼き」「も」定着

〜心のふれあいを求めて十四年〜

「私がこの刑務所に赴任して三か月目の六月でした。管区からの所内監察があった日でした。案内をして所内を回っていた時突然のことでした。風呂上がりの精神分裂症の被収容者がいきなり浴室に置いてあった六一〇ハップの瓶で私の顔を殴りつけてきました。右目の上が大きく腫れ上がり全治三週間の負傷でした。当時、被収容者と私たちとの関係が悪く、所内は折りつめた冷たい雰囲気の中にあっただけでしょう。担当看守さんや職員が殴られる事件がしばしばでした。刑務所で働く、私たちの心が被収容者に通じていなかったからに違いありません。」

右目には手を当てながら、十四年前の赴任当時を語られる房宗さんです。しかし、その後は持ち前の人間味あふれる受刑者への試みが次々と成果を上げていきました。中でも、全国ただ一つとも言われる「受刑者と一般社会人との運動会」を十一回にわたって続けてこられた英断には頭が下がります。昨年の九月十八日、第十一回の「岡崎医療刑務所秋季大運動会」に出席させて頂いた時の記録を一部紹介させていただきます。

房宗所長さんによれば、「発足に当たっては職員間でもかなり激しい議論があり、決断した思い出があります。今までに雨で中止になったことはありません。」ということですが、「楽しい野外での治療と教育」の場として位置づけて継続されてきた名物行事でもあります。

グレーの半袖・半ズボン・きれいに洗濯された真っ白な運動靴や帽子、黒の靴下、そして、左胸につけられたネームプレート丸坊主頭の受刑者二七人が入場行進で晴れ上がった天を仰ぎます。標高六十メートルの大谷の山をバックに職員に引率されて整列しました。

「自由の身になりたい」「あきらめ」「視点の定まらぬ瞳」「腰が曲がった老人」「歯が抜けたままの老人」と、来賓席での会話が交わされています。それでも、平均年齢四十三才を越えた受刑者達は、みな喜びにあふれています。

「われら選手一同はスポーツマンシップのとり、正々堂々と競技することを誓います。」

選手宣誓が力強く、緑一色の大谷の山に響きます。グラウンドに勢揃いした受刑者が「更生の歌」を斉唱し始めました。

「感激ですね。」参観の人たちの声にも力がこもって聞こえてきました。(上地小学校教務通信より)

「もし、万が一の事故でもあったら一大事です。女人禁制の場に、こともあろうに女子供を入れて……などと非常識との指摘も受けたでしょう。私は被收容者も人の子と人間を信じて敢て決断しました。これは、人の性は本来生れた時は善という信念にささえられてのことだったと思います。運動会での彼らの表情を見ると、どの顔も童心にかえった笑みと喜びがあふれています。何が、一体彼らを犯罪に走らせたのかと不思議に感じられるのです。」

静かな、それでいて、確固とした信念に基づくお話を聞きながら、房宗所長さんのご決断に頭の下がる思いでいっばいです。

昭和五十二年に窯開きした「上地焼き」もこうした所長さんの温かな人間観から生まれたものです。花壇づくりなどと同じように土をこねながら一心に新しい物の命を創り出す仕事を受刑者に与えたのです。当時、岡崎市の教育長だった鈴木正弘先生の紹介で陶芸家の杉浦豊楽さんを常任講師として迎え、本格的な焼き物づくりに刑務所あげての取り組みが始まりました。

「刑務所からの礼金がないというのが気に入ったという豊楽先生に教えを請いながらやるところまで歩いてくれました。職員から名前を募集して窯は『龍城窯』、焼き物は『上地焼き』と名づけました。鈴木正弘先生のご紹介がなかったら、到底この上地焼きは生まれなかったでしょう。」

テーブルの上に置かれた「上地焼き」の碗に視線を移す房宗さんでした。

「三三三 是非は是非、非は非ときっぱり言う親に」

「温かな家庭こそ今求められるもの」

「職員でつくっている楽団が伴奏して、年一回開く所内の自己慢大会で被收容者が歌います。私も、この三月十八日に被收容者の求めで『星かげのワルツ』を歌ったんですよ。」

十四年前の「所長殴打事件」とは似ても似つかない平穏な刑務所に変わってきた最近をこう語られます。あと半月で退官となる所長さんを慕う受刑者の優しい心づかいが伝わってきます。

いよいよ、「刑務所という制約された環境の中にも治療的な雰囲気を高めて社会復帰への足がかり」を求める岡崎医療刑務所の目標が着々と成果を上げているようです。そして、ご主人の隣りに、遠慮されながら座られた奥様に語られました。

「あなたにもこの四十年間、お世話になりました。こわかったり、危険を感じたことがあった？」

これは、殴打事件に関連して私たちが奥様にお聞きしたかったことでもありました。

「いいえ、よくそういうことを他の方からも聞かれますが、私にはそういうことが一度もありませんでした。」

固い絆で結ばれたご夫婦の前に、言葉がありません。落ち着いた庭に夕暮れが近づき、部屋に電気がともされ、インタビューの終幕がやってきました。

「先生、上地小学校は全国から集まった保護者でできています。学校もできて七年目、親たちも四十才前後の若い上地です。この私たちにずばり一言、ご提言をお願い致します。」

「そうですね。それは、『是は是、非は非』ときっぱり子どもたちに教えることではないでしょうか。デパートで買ってきた虫を飼っていて、子どもがむやみに殺してしまっても、知らんぷりをして何も言わない親がいるそうです。虫の命も大事にできなくてどうして人の痛みが分かる子どもを育てられましょう。昔、刑務所に入ってくる受刑者の大半は、貧困と家庭崩壊が大きな原因で罪を犯したものでした。しかし、今は、生活のレベルが高くなり、むしろ、心の貧困・心の病いが大きな比率を占め、両親のいる非行少年は半数を越えています。物の豊かさが心の貧しさを作り出すという皮肉な現象になってきています。今、必要なことは、家庭と地域の温かさではないでしょうか。刑期を終えた被収容者が、再びここに帰ってくるケースは迎えてくれる家庭もなく、帰っていく場もないという地域や社会に大きな原因があるのではないのでしょうか。」

時間を忘れてお聞きしているうちに、二時間半があつたという間に終わってしまいました。

(松原 暁三)

人の性は二元来善

私はある先輩から聞いた死刑囚の話が大変印象的で心を打たれたことがあるので紹介しましょう。この死刑囚は、過去、毎日歌壇に度々入選したことのある、今は亡き、ペンネーム島秋人の実話である。

彼が死刑を執行される当日、絞首台の前で賛美歌を歌い終わってから、次のような祈りを捧げたそうである。

「願わくば、精神薄弱や貧しき子らも疎まれず、正しき導きと神の恵みが与えられ、犯罪なき平和な世がうちたてられますように。私にもまして、辛き立場にある人々の上に神の恵みを……アーメン。」

この最後の祈りは、小学校一年生にして父母を失うという貧しき少年時代に、精薄として疎まれ育った過去を思い、死の直前になって本人の口から出た彼の真実の願いであったろう。そして列席していた検察官、刑務官の心をうった。

〜房宗秀夫著「矯正医療に従事して三十年」より〜



自宅で語る房宗さんご夫妻

県下に例を見ない土地区画整理事業の成功は皆さんの尽力によるものです。この土地には、以前から上地にみえた方々に加えて、沖縄・山梨・千葉県を除く全国から多くの方々が集まって住んでいます。私たちはこれを全国区と呼んでいます。このような場合に大切な事は学校と学区とのふれあいです。具体的には、学校だよりの「ふるさとシリーズ」や「学校ニュース」などを通して行っていますが、さらに広く学区とのふれあいを求めていき、学区を愛する心が国を愛する心へとつながって行けば素晴らしいと思います。そのために、私たちは上地学区の自然や歴史の良さを知り、さらに素晴らしいを発掘していかなければなりません。今の子供たちが明日の上地を担い、明日の学区を作り上げることになるのです。

二 上地区区画整理事業の概要と苦闘心談

加藤 利吉氏

畔柳市太郎氏

第一組理事長の加藤氏は、立派な土地区画整理事業をやり遂げた方らしく、はつらつとした声で話を切り出されました。

昭和四十四年

高度経済成長の波にもまれ、岡崎と蒲郡を結ぶ旧二四八号線の交通難の解消と土地造成を目的とする計画が現実のものとなってきた。

昭和四十五年一月十一日 正式な準備委員会の発足

昭和四十八年七月十六日 愛知県議の認可(面積二三三、五ヘクタール)

八月 五日 上地土地区画整理組合の設立総会、組合員五四八名

加藤氏はここで顔を曇らせ、当時を振り返られました。

二 上地学区の過去・現在・未来を語る

若葉の緑も一層鮮やかさを増した五月十五日、次の六名の方々をお招きして座談会を開きました。各団体の代表の方は、それぞれの仕事をかかえて忙しい中を、学校のため、それから上地学区のためにと万障繰り合わせて、座談会の始まる数分前に集まっていたが、八時半過ぎまで続きました。上地土地区画整理事業は今年の十月をもって完了し、両組合は解散だそうです。本校松原教頭の司会で、みなさんに上地学区の過去・現在未来を熟っぽく語っていただきました。参加した方々でさえ知らないような内容があり、貴重な写真や地図、文書などの資料も用意してきていただきました。

なお、記録は学校の大井、佐野、長坂が行いました。

上地第二土地区画整理組合理事長	加藤 利吉氏
上地第一土地区画整理組合副理事長	畔柳市太郎氏
岡崎市議会議員	渡辺 五郎氏
上地学区総代会長	成瀬 司氏
上地学区社会教育委員長	柴田 勝氏
上地小学校PTA会長	近藤 則康氏
上地小学校校長	嶋田 稔

「設立総会当日、会場には明らかに反対の立場と分かる人が相当いて、総会の議事が一時中断するという騒ぎであった。」

昭和五十年十一月十七日 工事に着手した。

しかし、約百二十名は農地死守・下流への水害の危機を理由に反対をした。実際、昭和五十年には集中豪雨があり、必死に土のうを積んだ。残念ながら、大切なもち米の田に泥流が入り込み、そのもち米を現物でたてかえたこともある。

昭和五十一年十二月 造成工事がはかどるよう、県の

指導を得て、第一・第二の組合に分かれて再スタートした。

この時、役員の中には土地区画整理事業に反対の方もお願いしてお迎えした。そして、貴重な意見が聞けたことは、その後の事業推進にあたりとても有益であった。氏の表情もだんだん明るくなられて、上地小学校は、今の愛知県勤労福祉会館のある場所に予定されていたこと、区画道路の間隔が広がったこと、学校や公園につながる歩行者専用道路の設置など、反対者のおかげで事業計画の見通しができたことを話された。

最後に、役員だけの組合であってはならない。組合員に信頼さ

れてこそその組合である。組合員の皆さんに信頼され、多大な財産を任せていただきともうれしく思っている、と結ばれました。

その頃、工事係として活躍されていた畔柳氏は、当時を振り返り、本来は認められないことであるが、上地地区の強い要望から、集合農地を残す。そして水源は大谷池という決定にこぎつけた苦労を話されました。

二反田（ドミィーのあたり）付近は埋立のために一日五百台のダンプカーが行き交い、ほこり公害と呼ぶほどであった。これらの工事のための負債は四億円にもほり、利息だけでも膨大な出費となった。集合農地ののり面は板さくを用いたため、六メートルの道路がその上に作れず、再びお願いをして、土地を提供していただいたような苦労もあった。

土地区画整理事業に反対した人々は、設立総会の場で棒に赤い旗を掲げて

「こんなに反対者がいるのにやるのか。」

と、強い口調で迫った。また、田畑のはざぐりに旗やむしろをかざしたり、沿道には「農地死守」と書いた看板をいたるところに立てたりした。



学校から南方を望む



学校から西方を望む

柴田社教委員長さんは、町と人づくりを中心にこやかに話されました。

ここは、無から有を生み出した学区で、町を作ってくださいった人達に感謝している。地域や学区づくりを考えながら行事などをやっているかねばならない。例えば、スポーツ少年団など、さかんなスポーツ感覚を大切にしていき、何年か続けば層が広がって交流が深まるだろう。また、全国からみえた人達はそれぞれふるさとを持ってみえる。今はやや遠慮してみえるが、それぞれ出身県の自慢話を気軽に語る会を開きたい。レクレーションとしての祭の行事などに参画し、祭を知らない子供たちにその良さを是非味わわせない。こうして文化の継承と同時に地域の結び付きが徐々にできていくと思われる。

京都の苔はどんなに素晴らしくとも、岡崎ではうまく育たない。岡崎には岡崎の、上地には上地の苔をはやさなくてはならない。新しい学区、新しい考え方を長所として考えていきたい。

と、将来が見えてくるような話をされると、他の方から郷土料理や民謡の会もどうだろうとの声がありました。

四 上地小学校PTA活動の課題

近藤 則康氏

若々しく、フレッシュ感覚の近藤PTA会長さんは、新しく出来る池など、学校への地域の方々の協力に対してお礼を述べられ、学校に直接結びついた話をされました。

現在の子供たちを取り巻く環境、特に物質面ではほぼ満たされている。しかし、これは、大人たちが一方的に押し付けていないかという気がする。子供が本当に要求しているのは、心なのか物や時間なのかをよく知って、我々は活動することが望ま

る。

PTAの活動自体、量的には増加しているが質はどうか？親子ともに将来的に満足感を得るためには、父兄からの要望が大切。そのために多くの父兄の集合の場を作り、コミュニケーションを増やす工夫を考えたい。しかも堅苦しい会ではなく、遊び感覚を發揮して親同士の個性の共鳴集団を作り、魅力あるPTA活動を進めていきたい。そして、個性や感性の豊かな子供たちを育てていこうではありませんか。

※ 上地小学校に通っている子の保護者を対象にした今年度の調査では、上地学区在住期間十四年未満が九十七パーセント、最長の人で五十年でした。

五 上地の町作りとその課題

成瀬 司氏

総代会の役割を前置きで話された後、成瀬総代会長さんは町作りの夢を語られました。上地区画整理事業以前、上地町は約三百六十戸ほどであった。新しくみえた方には、上地の歴史に関心を持っていただき、歴史をひもときながら、この土地や人に馴染んでほしい。三善寺や上地八幡宮などには古くから伝わっている建造物やそれまつわる話があります。

素晴らしい環境を、長期にわたる苦心の末作り上げていただいたので、私たちは明るく住みやすい豊かな町作りをしたい。



一、J R上地駅ができないだろうか。J Rとの接触を進めている。

二、日本全国の例にもれなく、上地にも高齢化社会はじわじわとやってきている。それに対応できるような環境整備をしていきたい。今の大谷池の周辺は常緑樹がほとんどである。春の桜、秋の紅葉、あるいは鳥のさえずりが目と鼻の先で聞こえるように実のなる木々を植えてみたらどうか。

大谷池の噴水を近景に、四季折々に変化を見せる木々や鳥などに囲まれて、おじいさん、おばあさんが孫の手を引く微笑しい姿、親子の明るい笑い声、そんな公園になったら今の子供達にとって何と幸せであろう。

このように、大きな視野で上地を見、土地区画整理事業の完了で町作りが終了したわけではなく、これから二十一世紀に向けて学区民が進む道を示して下さいました。お話を聞いていて、ここで述べられたことが今すぐにでも実現しそうな気がしてきました。

※ 三善寺

今から約三百年前の元禄十二年、この地方の奉行職だった早川武左衛門が寄進して建造されたものです。上地町下屋敷に住んでみえる早川博さんは、その十二代目のお方です。

ご本尊の一つ、「長命地藏」さんについては、昭和六十三年のふるさとシリーズ一に、また、「三善寺」については、同シリーズ十二に詳しく記されています。

※ 上地八幡宮 神社明細表に、「建久元年源範頼創立す」とあります。

建久元年は一一九〇年。範頼は平家追い討ちのため西下する途中、上地の豪族大見藤六の家に休憩しました。その時、庭に祭ってあった神様が八幡社であると知り、武運長久と戦勝を祈願した。勝利を得た後、三河の守護となった範頼は社殿を造営させた、とされています。

〔六〕 上地の将来展望

渡辺 五郎氏

ご自身が昭和四十二年に上地町に移ってみえたことを懐かしみながら、先の五氏の話に触れながら、話されました。勤労福祉会館は、最初の計画にはなかったが、国や県の補助があつて土地区画整理事業が進められてきたので、公共的な建物を上地の一つ、という考えで建設された。上地小学校の用地については、皆様がとても協力的であつた。開校と同時にプールや体育館も使用できるように取りはかかってもらったことなど、一般に余り知られていない部分での苦心談をされました。そして、感心されていることや今後の課題を提示されました。

- ・子供達が大きな声でもでかでも挨拶してくれるのでとてもうれしい。だが中学校へ行くとときれてしまい残念。
- ・いい行事は続けて、改めるべきものは新しいセンスをいかしていきたい。
- ・みんなが結束できる事業を行なう。キャンプ場の充実と花の咲く樹木
- ・衣浦線を南に貫き。J R駅の新設
- ・総合老人センターの活用、南公園入口の信号を設置など

半世紀先を見通して、安全で明るく住みやすい地域、私たちのカラーを表わす地域を作りたい。そのために多くの人によるシンポジウムを開催しようではありませんか。お話を聞いていたみなさんがうなずいたのは言うまでもありません。



三、初夏の大谷公園

虫と植物を追って

児童等の声
空にひろがれ地に響け
大谷の山はヒメジョオンの白



一 春から夏へ

四月、大谷の山はまだ白っぽく、ぼうっとした若草色に包まれていました。一雨ごとに緑は深さを増し、大谷の山はくっきりと輪郭を見せるようになりました。

春に淡いピンクの花をつけていたハルジョオンにかわりヒメジョオンが初夏の到来を告げています。今は一年で最も木々が輝いて見える季節です。湖面に目をやれば四月に完成したばかりの「平成の泉」が勢いよく水を吹き上げています。南に回れば噴水の水がシャワーとなり美しい虹をつくっています。

草も木も虫も、生き物たちが最も輝く初夏の大谷に、子供たちの声が響き渡ります。

二 自然観察ウォッチングに挑戦

たのしい大谷公園の虫さがし。春と夏に、虫とか花をとりに行きました。
大谷公園では花や虫がいっぱいとれます。 (三年 川野 貴洋)

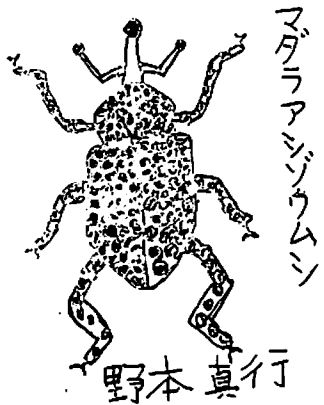
五月初めに子供たちは、意識的に草木や昆虫を自然のままの姿で見られることを初めてしました。一回目のウォッチングです。裏返ったコメツキが勢いよく跳び跳ねるのを見て、驚きの声をあげる女の子。オニタヒラコの花をタンポポと間違えている男の子。今まで見えなかった数多くの植物や動物は、子供たちに自然の驚きと不思議さを与えてくれました。

三 大谷に生きる虫たち

子供たちのまとめた観察ファイルの記録に基づいて、大谷に生きる虫たちを紹介しましょう。

● 第一回目ウォッチング

五月十日 天気 晴れ 気温 二十二度	
1	オニヤンマ (飛んでいた ↓採集)
2	コメツキ (木に止まっていた)
3	コクワガタ (木の中)
4	ゾウムシ (木の中)
5	バッタ (草むら)
6	アオスジアゲハ (飛んでいた ↓採集)
7	ハナムグリ (木の花)
8	トラフカミキリ (木に止まっていた)



野本真行

9	カメムシ (草むら)
10	ジャノメチョウ (木に止まっていた)
11	アリ (土や木)
12	ガ (種類?) (木や草)
(13)	クモ (木や草) ※ クモ類
(14)	カナヘビ (土) ※ 八虫類

五月にいたるとは予想もなかったオニヤンマやコクワガタ、アオスジアゲハを確認し、春は早足に去りつつあるように思いました。

子供たちは、オニヤンマの大きな複眼や頑丈そうな鋭いあごを食い入るように見つめていました。

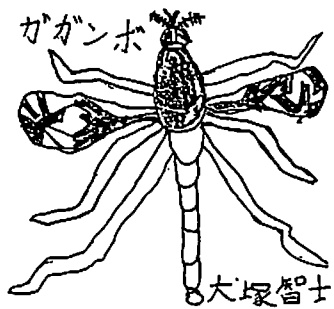
●第二回ウォッチング

ほくは、ケムシをさがしていたら、ガガンボが葉っぱに止まっているのを見つけました。はじめはなにか分からなかったけれど、先生がおしえてくれました。ガガンボは、すぐに見つかりました。二ひきいっしょにいたので、いっしょにとれました。

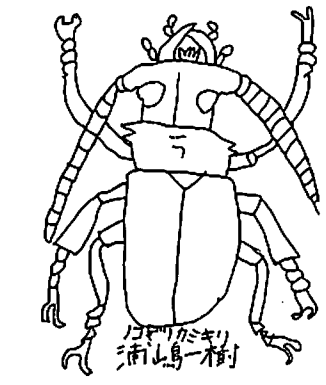
(ケムシ研究家 三年 青木 秀陵)

六月六日 天気 晴れ 気温 二十三度

1	モンキチョウ (草むら)
2	モンシロチョウ (草むら)
3	アブラムシ (木にいっぱいついていた)
4	オサムシ (木の茎)
5	ウンカ (草むら)
6	カマキリ (草むら)
7	ガガンボ (木の葉の上) — 図参照 —
8	カ (山の中にいっぱい)
9	クマバチ (飛んでいた)
10	スズメバチ (がけの上)
11	ゴマダラカミキリ (どぶの中)
12	ヒサマツミドリシジミ (草の茎)
13	ヒカゲチョウ (草の上)
14	ムギワラトンボ (木の上)
15	ハルゼミ (鳴き声を確認)



16	ムラサキシジミ (飛んでいた)
17	ナキイナゴ (木の葉)
18	テントウムシ (飛んでいた)
19	ヒラタムシ (木の幹)
20	シャチホコガの幼虫 (トイレの近く)
21	アメリカシロヒトリの幼虫 (木の葉)
22	ゴマタラカナブン (木の幹)
23	ノコギリカミキリ (みぞの中)
24	オオホソクヒゴミムシ (木の枝)



ノコギリカミキリ
浦島村

(※ 五月十日の調査と重複しないもののみ)

前の調査からおおよそ三週間後の大谷の山はすっかり賑やかになっていました。夏の主役たちがそろい始めました。子供たちは蚊対策に虫よけスプレーを体中たっぷりとぬり、大谷の山に虫たちをもとめてかけずりまわりました。五月に目をつけておいたクヌギの木にクワガタがいないかと、一目散に走って行った浦島君たち、ケムシを探し求める秀陵君、グロテスクなシャチホコガの幼虫に見入る川野君たち、子供たちの目はみんな輝いて見えました。帰る頃になると突然スズメバチがあらわれ、子供たちは怖がるやら見たいやら、とんだ一幕もありました。

四 大谷に咲く野草たち

● 第一回目 ウォッチング

虫たちと同様に子供たちの研究ファイルの記録に基づいて、大谷に咲く春の野草を紹介しましょう。

五月十日 天気 晴れ 気温 二十三度	
1	ハルジオン (道端、山すそ)
2	セイヨウタンポポ (道端、山すそ)
3	オオバコ (道端)
4	シロツメクサ (遊園地)
5	オオジシバリ (道端、山すそ)
6	カタバミ (どぶ) — 図参照 —
7	オランダミミナグサ (道端、山すそ)
8	ハハコグサ (道端、山すそ)
9	ノボロギク (道端、山すそ) — 図参照 —
10	オニタビラコ (畑の横)
11	イ (道端、池の水際)
12	ハルノノゲシ (道端、山すそ)



居福涼子

13	チガヤ (道端、遊園地の土手)	
14	チチコグサモドキ (道端)	
15	トキワハゼ (どぶ)	
16	ニワゼキショウ (道端、遊園地)	
17	スズメノテッポウ (道端)	
18	スイバ (山すそ)	
19	カラスノエンドウ (山すそ)	
20	ムラサキカタバミ (道端)	
21	オオイヌノフグリ (道端)	
22	ハルガヤ (道端)	
23	カモガヤ (池の前)	
24	ハコベ (山すそ)	
25	バライチゴ (池の南側の土手)	※ 木本(もくほん)
26	ヤマウルシ (山の中)	※ 木本
27	アセビ (山の中)	※ 木本



今を盛りと二十七種の草花たちが咲き誇っています。大谷ならではの特別珍しい草花を見かけることはありませんでしたが、草花に春の息吹を感じることができました。

●第一回ウォッチング

五月の第一回目の時とくらべて大谷の草花たちは、どのように変わっているのでしょうか。子供たちは、ただ単にどのような草木が生育しているかを調べるのではなく、「春との違い・変化」を課題に、大谷の山を歩きました。

		六月六日 天気 晴れ 気温 三十二度
2	1	ヨウシユヤマゴボウ (よく咲いている) ヤマハギ (もう咲いている)
3	4	キキョウソウ (以前は咲いていなかった) ヒメジヨオン (ハルジオンにかわり咲いている)
5	6	コモチマンネングサ (よく咲いている) オオイヌタデ (咲き始める)
7	8	ムラサキカタバミ (以前からよく咲いている) ドクダミ (咲き始める) — 図参照 —
9	10	ツユクサ (咲き始める) アザミ (咲き始める)
11	11	シモツケ (よく咲いている)



夏の草花が咲き誇る大谷の山を想像していましたが、予想に反して意外に多くありませんでした。

目に付くのは、枯れたハルシヨオン、まだ咲いてはいるが実をたくさんつけたハコベ、すっかり枯れて黒いサヤが目立つカラスノエンドウ、綿毛をいっぱいつけたセイヨウタンポポ、春の名残をたくさん見つけることができました。

意外に少なかったのは、六月の初めは夏の草花にとって変わる時季に当たるため、夏の草花にはやや時季が早いのかも知れません。それでも、子供たちは十二種の草花を確認することができ、初夏の豊かな自然を感じたことでしょう。

六月六日(火)に大谷公園に行つて、春のときと草木や虫はどんなふうに変わっているかをしらべました。

大塚君が木のかわをいっばいはがして「わあ、この木ピンク色。」とかいって見たら、そこに茶色いアブラムシが二十びきぐらいかたまっていました。

ヤマウルシは、わたしは葉っぱをさわってもかぶれると、はじめは思っていたけど、木や実の白いしるをさわるとかぶれるんだよ、とおしえてくれました。

わたしは、春と夏では、夏のほうが虫が多いと分かりました。

(三年 落合 登輝子)

五 秋への思い

秋に大谷公園に行くときには、夏に行ったときと、虫や草がどんなふうにかわっているかな。

虫が木の葉の下に集まっていたり、土の中にもいろんな虫がいると思うな。みんな、土の中が見えないから、土の中だと安全なんだな。土の中にすんでいる生き物は、頭がいいんだね。

それから、草や木はどうなっているんだろう。ヨウシュヤマゴボウは春に行ったときにも、夏に行ったときにもあったけど、どうなっているのかな。もう、むらさき色の実になっているのかな。それとも、まだ白い色なのかな。

春や夏になかったものもたくさんあると思うな。早く行きたいな。

(三年 南 恵理子)

豊かな自然に包まれた大谷の山、これから夏、秋、冬と四季の大谷を子供たちとしっかり見ていきたいと思っています。

(青木 純)

四、上地にも空襲

〇〇 加藤又之信さんのお話 〇〇

上地に空襲だなんて、山や田んぼばかりなのにと思っている人がほとんどでしょう。ところが、実際に空襲があったのです。当時、福岡町上地字大谷に住んでみえた加藤又之信さんは、五月二十三日に来校され、五年生全員の前で、御自身の体験を思い出しながら話して下さいました。

「忘れもしない七月十九日

昭和二十年七月十九日、夜の九時半ごろ、上地に空襲がありました。もう一か月前に終戦を迎えたならば、上地に爆弾は落ちてこなかったはずですが。きつと落ちなかったことでしょう。

一回目の空襲は、B29が五機編隊で蒲郡方面からやって来ました。

「あっ、来た来た。」

幸田の駅付近の上空の飛行機から十五メートルくらい下にパッと明りが見えました。なんだろうな、と思う間もなく次から次

へポッポッポッポッと見えてきました。そのうちに、ビューン、ザザザザザザという音がして、あたり一面に焼夷弾（しょういだん）が落ちて来たのです。ものすごく、ものすごく雨のように落ちてきました。田んぼの中につきささった様子は、まるで岡崎の花火大会で見られる金魚花火のようでした。

一時間か一時間半後に二回目の空襲です。この時は一回目より多く上地で八軒、大谷でも四軒が焼けてしまいました。私の家も焼けました。焼夷弾が落ちると、まず、家の中に入れてあった麦わらや小麦、なたねに火がつき、家がいっぺんに燃えてしまったのです。消防の人も来てくれたけれど、今の消防車と違って、学校のシーソーみたいに手で押さなきゃならぬので、最低八人が必要です。とても消せたもんじゃありませんでした。

「二 穴工龍警言報だた

空襲警報が出ると、私たちは、約五百メートルほど離れた防空壕（今の前田公園のあたり）まで一生懸命逃げました。防空壕に逃げ込んだ時（もう、何もかもいらぬ。命だけあればよい。とにかくここへもぐれ



熱心に話される加藤さん

は何とかなる。) という思いでした。

焼夷弾の穴の数からして、三十坪に十五本、上地で五、六百本ほどが落ちたことになると思います。田んぼに落ちると、深さ一メートル、周囲四メートルぐらいの大きな穴があいてしまうので、その穴を埋めるのに大変でした。しかも、耕耘機(ことうんき)を使うようになった頃も一度穴が開いて埋めたところは、耕耘機が傾いてしまっって、本当に困ったことを思い出します。今は土地区画整理ですっかり良くなったけれどね。

『三』焼夷弾で遊んだ

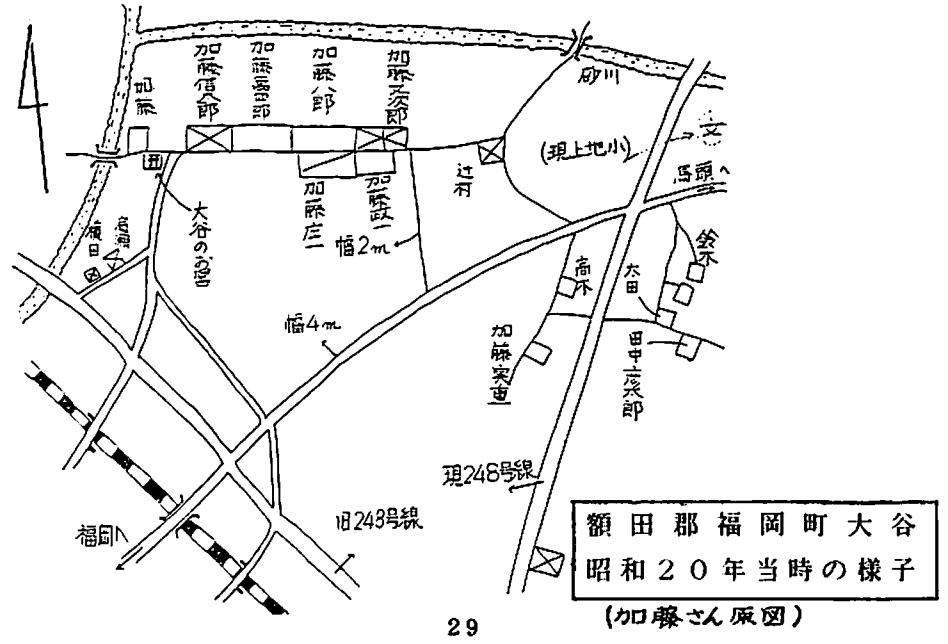
今のようにテレビも遊具もなかった小学五年生の頃に、土手に落ちていた焼夷弾(しょういだん)を掘り起こして家に持ち帰ったものです。それを通って足の上に落として、私の指がぶれてしまいました。また、焼夷弾の中に入っている油を道にまいて、どのくらい火がつくのかいたずら心でやってみたら、その火の早いこと早いこと、十メートルほどがわけもなく、あっという間に燃えて、火がつかなくなってしまいました。こんなすごい油なんてあったもんじゃないと本当に感心したことを覚えています。

『四』二十一人も入れる防空工塚

上地にあった防空壕は(ぼうくうごう)、村(六軒)の三十人全員が入れるぐらいの大きさでした。穴の上に木が生えていたような所で、人の背より高い斜面に横から穴を掘り、入り口を作りました。南公園の遊園地のあるあたりには防空壕がいっぱいありました。家が焼けて、住む所がない人は、防空壕の中でしたら暮らしていました。その中は湿気が多く、ノミやシラミがすぐわいてしまったものでした。そのために女の子は学校でDDTという薬を頭にかけてもらっていました。家には石鹸もないのでいくら洗っても落ちません。ぼうず頭は清潔でいいぞ、と笑いながら話して下さいました。

こんな思い出話が一段落つくと、TPPを使って家の位置を説明されました。第一回目の空襲で焼けてしまったのは加藤信太郎さん宅、それから第二回目に加藤又次郎さん宅、……。火を消そうとして火傷をされた方が一人みえたけれど、幸い大谷では亡くなられた方はいませんでした。

「そんな空襲のあった戦争が終わり、今のようにするにはどのくらいかかりましたか。」
という、一組の伊予田さんの質問に対して、過ぎ去った四十数年前を思い出しながら、こんなふうにお話して下さいました。
「中学校を卒業するくらいまでかなあ。約十年はきびしかったですね。」



食べ物はもちろん十分でなく、白米はほとんど食べることがありませんでした。いもを細かく切って煮て、雑炊（ぞうすい）を作って食べました。学校へ行っても給食はないし、『こんなもの、まずくていらん』なんていうわがままは言えません。着るものにしても、店に売ってないんだから、自分で作らなくてはならなかったのです。」

こうして、四十五分間はすぐに過ぎてしまいました。大谷で鉄工所を経営してみえる加藤さんは、大勢の前でお話をされるのは慣れてみえないでしょうが、じっと耳を傾ける子供達とも息がぴったりと合って最後まで熱の入った話をされました。

戦争の話は、子供達にとって他からはなかなか聞くことのできない貴重なものです。平和の大切さを心にきざむと同時に、これからの学習にもどんどん取り入れていきたいと、五年生の担任も意気込んでいます。

加藤さんのお話を聞いて

(五の四 安田 美奈)

加藤さんというおじさんから、空しゅうのお話を聞き、上地にも空しゅうがあつたことを初めて知りました。

私はおじいちゃんといっしょに住んでいます。おじいちゃんは兵たいさんだったそうです。だから戦争や空しゅうの話をよく聞きます。だけど、この上地が空しゅうにあつたことは知りませんでした。でも、けがをした人は一人と聞いて（よかつたなあ。）と思いました。

もう一つ、お話の中で、小さなばくだんをとつておいたそうですが、無くしてしまつて見せてもらえませんでした。すごく残念でした。見たかつたです。

加藤さんのお話で、私は涙が出てきてしまいました。お話の仕方が上手だったからです。お話を聞きながら、（平和っていいなあ。）と思いました。私は、自分でもすぐくためになつた、と思つていきます。

五、上地を通つた塩の道

（一）新しいみちしるべ

上地自動車学校の南で、国道二四八号線と県道衣浦線が交差する。そこに立つて南の角を見てみよう。白いボールのうえに『吉良道』という標識がある。おやつ？どこか他でも見たような気がする。学校へ行き帰りに探して見よう。読み方を「きらみち」という。

「吉良道」の呼び名は、この道を通つて吉良から三河の山間部へと塩や海産物が運ばれたためについた。逆に、三河山間部から吉良へは木材、米などが運ばれた。

（二）「土口由良道」をたどる

新しい道路が、新しい場所に作られていくので、「吉良道」といってもなかなか正確な姿がつかめない。

「たしか、岡崎医療刑務所のそばを通つていたのだが、県道岡崎・幸



上地町交差点付近

田線のあたりでどうなってしまうのだろう。」

そんな時、以前、和太鼓を借りたお寺の前を「吉良道」が通っていたという話を思い出した。夏の暑さがまだ残っている九月初旬、校長、教頭、長坂がそのお寺を訪問した。

そのお寺、等周寺（とうしゅうじ）は若松町南之切にある。車を降りると、これが「吉良道」なのだ、と思える落ち着いた道が目に入る。山門をくぐり天野住職に会う。なかなか由緒ある寺で、今はちょうど鐘樓の再建中であった。天野住職さんは歴史にくわしい方で、今までの知識の中から「吉良道」について話して下さいました。

そのお話から、上地町内、福岡町内には、複数の「吉良道」の存在が分かった。（下図参照、字名は旧のまま）

①東の方からの道

上大谷坂から斜め南へ↓大谷坂↓小田ヶ入（医療刑務所）↓現在の衣浦線↓上地八幡宮↓JR東海道線↓福岡町東市仲↓土呂本通り

②北の方からの道

針崎↓若松町北之切↓南之切（等周寺東）↓福岡町北御坊山↓仲道↓東市仲↓土呂本通り

六、上地の山にはきのこがいっぱい

「このきのこは、ハツタケだよ。」

「いや、ちがう。ヒタの色が、少しちがうような気がする。」

「でも、緑青はハツタケ特有のものだよ。」

「そっこのきのこは、ストウシのようなだが。」

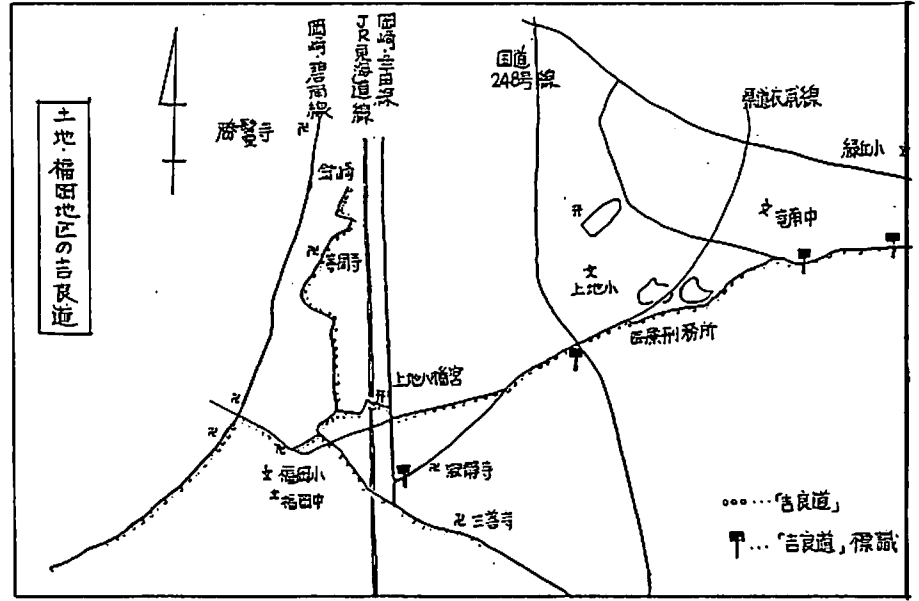
「ストウシとよく似ているが、どうも……。」

十月十七日の午後、大谷公園の東斜面から、十本あまりのきのこをとってきた松原教頭先生を取り囲んで、しばらくの間、きこの談議が続きました。職員室のテーブルの上に置かれた、松葉やナラの葉っぱをくつつけたハツタケやストウシらしききのこは前夜の雨で、まだ濡れています。

授業を終えた先生たちが、次々と職員室へ帰ってきます。それぞれが、それぞれの若い頃を思い出して、食えるとか、食えないとか言いますが、なかなか落ち着きません。松原教頭先生が、『きのこ辞典』を取り出してきました。よく似た写真が載っていますが、最近、毒きのこ事件が新聞紙上をにぎわしていますので、ハツタケとか、ストウシとかはつきりとは誰も言えません。（上地町宝六の成瀬稲蔵さんは、上地の山に詳しいから、聞いてみましょう。）というところで、一度、現地で教えて



5年 横山 達也



頂くことになりました。科学部の子どもたちの同行も了解して頂きました。

十月二十二日の土曜日。午後一時、秋の冷え込みを感じる曇り空でしたが、サンクガーデンに並んだ三十人の科学部員は、いっばいの収穫を期待して成瀬さんの息子さん宅を目指して出発しました。手に手に大きなビニール袋を持っています。

成瀬さん宅に着くと、稲蔵さんは、眼鏡の奥からやさしそうな目をして笑顔で待っていて下さいました。挨拶をすますと、手甲、脚半で身を固めた稲蔵さんからお話をお聞きしました。

「この山の東斜面は、区画整理で山を削ってできたものです。オマツは植林したのですが、メマツは自然に生えてきたものです。マツタケは三十年ぐらいの木の下によく出てきますが、まだ木が若いので出てきません。今出ているのは、ホンバツと、クソバツの二種類です。クソバツは食べられますが、味がうすいのでこの辺の人はあまり食べません。」

青木先生が『きのこ』の本を取り出して、ホンバツは学名ハツタケ、クソバツはチチアワタケということ、写真を見せながら付け加えました。いよいよ山に入りました。いきなり、あちらこちらから、

「あった、あった。」
と、黄色い声が聞こえてきます。

「毒きのこ、毒きのこー」
稲蔵さんのところまで恐る恐る持ってきましたが、一目見るなり、

「これがホンバツ（ハツタケ）です。」
みんなが寄ってきました。うすいピンク色をして、かさの裏側は青緑がっています。職員室で心配していたきのこは、やはりハツタケだったのです。

また、散りじりになりました。五分もすると、ビニール袋に五、六本はみんな入っているまでになりました。かさが開いていくのが多くありますので、稲蔵さんに聞いてみますと、時季的に一、二週間遅いようですが、かさが開いても十分食べられるそうです。時間とともに、さらに採れていきます。ノリ面ですが、多くはマツの葉で覆われています。マツの葉をどかすとホンバツやクソバツが見付かります。さすがに六年生の中西・中根・前山・吉戸さんたちは、早くから気が付いたのでたくさん採りました。足の長さが五センチもある、きのこを見せ、

「おじさん、これなあに？」
と尋ねると、さすがの稲蔵さんも困った顔をして

「これ、たくさんあるが、おじさんも分からん。アシナガってやつかも知れんが、先生の持っている図鑑で調べてごらん。」科学部の子たちに、分からないときは辞典や図鑑で調べるように教えてくれました。



チチアワタケ (クソバツ)

5年 小森 八千恵

「先生、きのこに変なもの住みついているよ。」

よく見ると、クソバツのかさの裏側に、小さな虫がいっばい住みついています。軟らかいかさの裏側は住み良いのでしょうか。稲蔵さんは、

「ナメクジも付いていることもあるよ。裏から見ると、パンみたいでうまそうだからね。」
と、きのこについて言われました。

小一時間もする頃、稲蔵さんは、昔を懐かしんで、

「戦争中は、味噌汁やおつゆの中に入れたり、うどんの汁の出しにしたりしたものです。ほんとにうまかったですよ。この前、

久しぶりに、うどんの出しを取ってみましたが、どうも昔の味は出せんかった。食べ物の無い時代だったから、特別うまかったのでしょうか。」

周りにいた子供たちも、食い入るように聞いていました。さらに、山のてっぺんを指差しながら、「あそこにある、クヌギやナラの落ち葉には、シメジやロウジ、ネズミタケなどが出たもんです。最近はお出なくなりました。でも、ホンバツなどは二、三年前から出るようになったから、これからは楽しみですね。」

今年、七十六才になられるとは思えないほどお元氣な稲蔵さんを囲んで、だんだん人の輪が大きくなってきました。収穫もいっぱいのおようです。

まだまだ、きのこのことや他のことでもお聞きしたいこともありましたが、だんだん雨模様になってきたので、終えることにしました。みんな集まったところで、一人だけストウシ（アマタケ）を採った子がいることが分かりました。五年生の小林君が採ったもので、おじさんによると、色は黄色くて、かさの裏はスポンジのようになっています。クソバツと並べてみると違いがよく分かりました。

お別れに、成瀬稲蔵さんを囲んで記念写真を撮りました。この日は、稲刈りを中断して来て下さったそうです。お忙しいのにありがとうございます。

学校に戻ると、PTAの役員会を校長室でやっていたので、科学部顧問の青木先生が、役員の方々の前に並べてお見せすると、こんな近くに食べられるきのこが採れるなんてと、びっくりしてみました。

サンクガーデンでは、科学部の子たちが袋から採りだして、大きさを比べています。今晚のおかずはハツタケ飯でしょうか。

(大井 正之記)

上地のむかし話

七、『きつねのちょうちゃん』

すこしむかし、大谷の村のお話です。

ある年の冬のこと、すきえもんが、しごとをおわって帰ってきました。

日はとっぷりくれて、山のはしに青いお月さんが顔を出しはじめました。

「おお寒い。今夜はばかにひえるなあ。」

に車を引いて、砂川のどてをきました。

すると川の中で音がします。

ジャバ ジャバ ジャバ ジャバ

「おや？」

目をすかして見ると、だれか川の中にいます。頭にタオルをのせてい

ます。

「ああ、いい湯だなあ。」

(こりやおかしい。)

よく見ると、なんと、うどん屋のさかえもんです。

「おおい、さかえもんさ。こんなところで、なにしておるだ。」



6年 羽原美恵子

「おう、すきえもんさか。いい湯だぞ。お前さんも入ってこいよ。」
「はか言っちゃいかん。ここは砂川だ。お前、キツネにばかされとるぞ。
こんな寒いとき、川の中におるとこごえ死ぬぞ。」

「ぐずぐず言っとらんで、お前も入って来いよ。」

「さかえもんさ、お前、キツネにばかされとることがわからんのか。」

いくら言っても気がつきません。しかたがないので、すきえもんは土
手をおりて、さかえもんを川から引きあげました。

さかえもんは、目がとろおん、体がぐたあんとしていました。

「おい。しっかりせよ。」

ほつぺたをたたくと、はっと気がつきました。とたんに、体がぶるぶ
るふるえだしました。

急いできものを着せて、に車にのせ、うちへつれてきました。

「おかみさんおるか。さかえもんさが、キツネにばかされて、川へ入っ
とったぞ。」

早くあつたかいうどんを食へさせてやれよ。」

でも、つめたい水に長いことつかっていたので、うどんぐらいでは、

あたたまりませんでした。

さかえもんは、これがもとで高い熱を出して、いく日もうなっています。

したが、とうとういきをひきとってしまいました。

おそうしきがすんで、五日たちました。

すきえもんが、いつものように砂川のそばを通ると、キツネがむこう
のどてに、ほんやりすわっています。

(さかえもんをばかにしたキツネかもしれん。)

石をなげようとすると、

「コーン」

こちらをむいて、一声鳴いて大谷坂(おおやさか)の山へ走っていっ
てしまいました。

つぎの日とおると、またきのうのキツネがいて「コーン」と鳴いては
げていきました。つぎの日も、またつぎの日も「コーン」です。

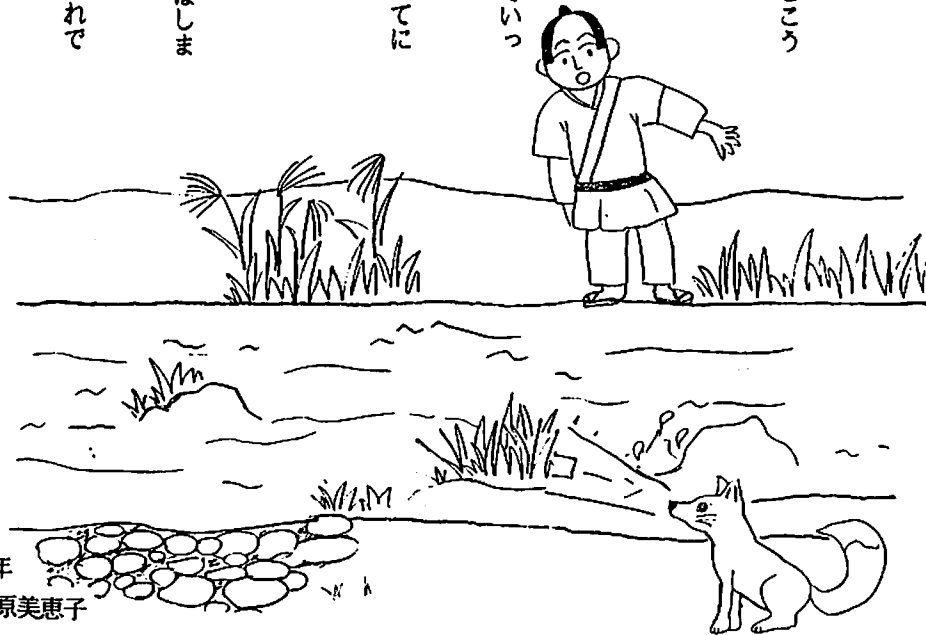
「ありやきつとごめんなさいって、あやまってるだぞ。」

「うん、そうかもしれんなあ。」

そう思ったので、みんなはキツネを村からおい出すようなことはしま
せんでした。

さて、うどん屋のおかみさんは、一人になってしまいました。それで
も店はつづけていました。

そのころから、どういいうわけか、お客さんがたくさん来るようになり



6年
羽原美恵子



6年 羽原美恵子

ました。

「小畑のとうげから、うどん屋のちようちんがよく見えたで、食べにきたよ。」

「ま夜中に吉良道（きらみち）がわからんで困ったが、うどん屋のちようちんがとっても明るかったで、たすかったよ。」

「うどん屋のちようちんは、夜中もついているそうだ。」

おかみさんは、

（夜中はちようちんをけておくのに、ふしぎなこともあるもんだ）

と思いましたが、なぜか、よくわかりません。

「あれは、キツネがつみほろぼしにやったじゃないか。」

「キツネのちようちんでなかったら、あんなに明るいはずがない。」

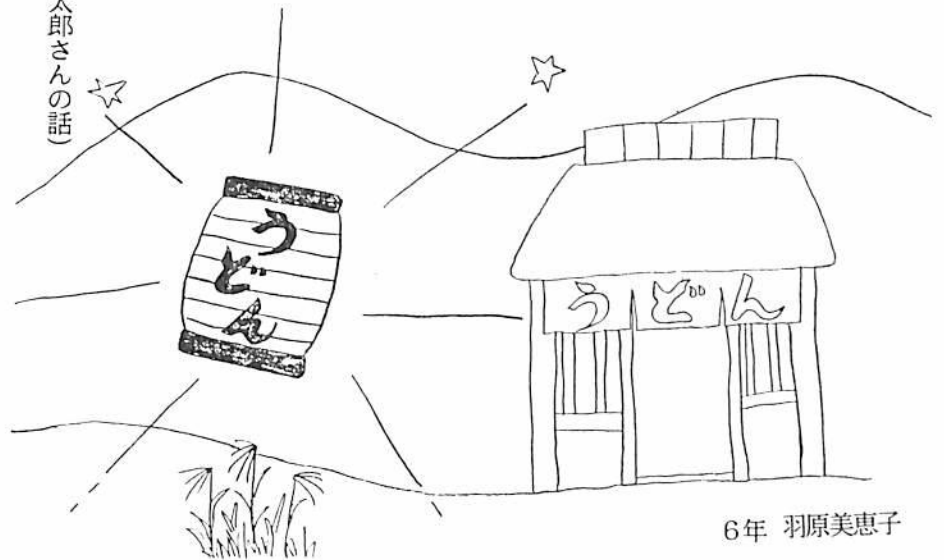
こんなうわさが、村に広まりました。でも、ほんとうのことはわかりません。

おかみさんは、あいかわらず元気な声で、

「はあい。大もり一ちょう、おまちどうさまあ。」

と、やっていました。

（この話は福田清美さんの「おじいちゃんからのたより」（加藤信太郎さんの話を参考にしました。）



6年 羽原美恵子

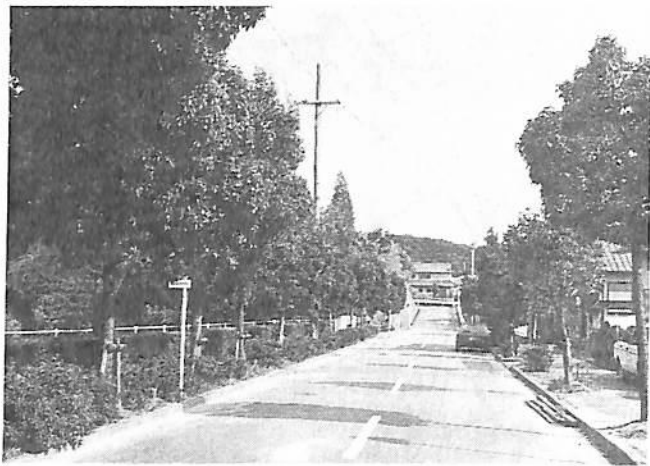
八、季節を知らせる街路樹

「J・・・はぜの葉赤くて入り日色 小さい秋 小さい秋 小さい秋見つけた。」

はぜの葉ってどこにあるのかなあ。学校の体育館東に六本あるのは、ナンキンハゼといって、寒くなってくると、葉の色がきれいな赤色になる。勤労福祉会館のほうから通学して来る子は、道路に沿って植えてあるナンキンハゼを見ることが出来る。このような木を街路樹という。

岡崎市にはポプラ、ケヤキ、イチヨウ、ナンキンハゼ、トウカエデなどが多い。これらのほとんどは秋になると紅葉し、葉が落ちる。

上地学区には、高木としてナンキンハゼ、クス、ハナノキ、アメリカフウ（カエデ）、プラタナス、ユリノキ、ケヤキ、ヤナギの八種類がある。低木にはヒラドツツジ、キリシマツツジ、カンツバキ、クチナシ、カイズカイブキ、アベリアなどがある。ふつう、街路樹というと高木の方をさすことが多い。



順調に育ったクスの木（奥山田池の西）

佐野功尚さん（若松東二丁目）のお話

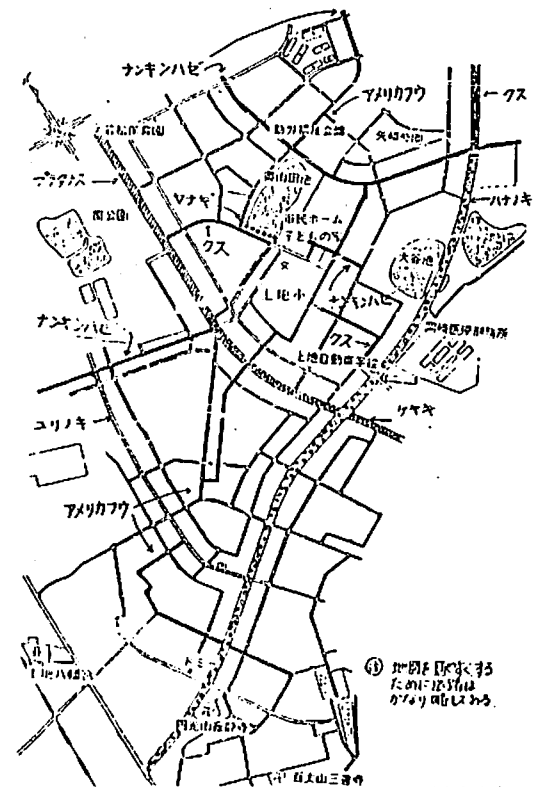
家の前のクスは、付近の区画整理が終わって植えられたもので、十二、三年になる。根の張りが良く、歩

道の舗装を盛り上げてしまっている所もある。しかし、夏の暑い時には、ちょうどいい木陰ができる。最初に植えられた時は、ちょうど私の腕ぐらいの太さだったが随分成長したものだ。散った葉は、この付近の住民が自主的に掃いたりしている。

付近のクスの木には、一年に六、七個の鳥の巣を見ることが出来る。残念ながら、夏には葉が茂って来るので、ヒナの姿は見られない。春や夏の夕方には、スズメのような小鳥が、クスの木だけでなく、近くの電線にも数百羽以上が集まって来る。やかましいほどであるが、自然が徐々に減ってきたのでしよう。

では、上地学区には何本くらいの街路樹があるのだろうか。

勤労福祉会館を中心としたナンキンハゼ三九一本、国道二四八沿いのケヤキ一四四本、プラタナス二二〇本、学校の南からドミールの方へ帰る通学路に沿ってあるアメリカカブウニ六一本、奥山田池西や自動車学校東のクス一四二本、ヤナギ十本、衣浦線の中央分離帯に植えられたカイスカイブキ四五〇本であった。たくさんさんの街路樹が私たちに心の安らぎを与えてくれている。(長坂 記)



街路樹分布図

九、藤六のお地蔵さんを訪ねて

「上地町の浜街道と鎌倉街道の辻に藤六のお地蔵さんがありました。しかし、区画整理のため、その場所で町をお守り頂くことができなくなり、やむなく今の地蔵公園の西側に移転建立させて頂きました。」

今年の五月、上地市民ホームで開催した「上地学区を語る会」の折、十年前を思い出しながら、こう話されたのは畔柳市太郎さんでした。(上地第一特定土地区画整理組合副理事長)

大谷坂貯水池水路のサイフォンヒューム管が、地表に突き出た道端にひっそりとお座りになっているお地蔵さんの写真には、その昔、上地を旅した人達の道案内役も果たしてきた風格を感じさせられます。

「あの、地蔵公園東側の道端にお祭りされているお地蔵さんですね。随分、もう昔のようですね。」

「ええ、私達の子供の頃からずっとあったし、江戸時代からの道祖神だと聞いています。」

その後、市民ホームの座敷で写真を前にした校長先生初め本校役職職員と市太郎さんとの会話がはずみます。

「ぜひ、そのいきさつを調べてみたいですね。」

「信仰に関わるものですから、公園の中には移転することができず、すぐ東の道端ということになったんです。昭和五十八年十月に、今の位置に移転するに当たっては、私もお地蔵様の台座を造らせて頂きました。」

「近くの方たちが結構毎日お世話をして下さっています。有難いことです。」

第二組合の加藤利吉理事長さんも加わり、お地蔵さんへの話題が広がっていききました。



移転前のお地藏様



現在のお地藏様

「二」 「右おかさき左ところ」の道しるべ
 ～由来を語る畔柳八百吉さん～

所用のため「上地学区を語る会」に欠席された上地第一特定土地区画整理組合理事長の畔柳八百吉さんから、次のような書状が寄せられたのは、五月も終りの頃でした。

「先日会の模様をお聞きして、とっても嬉しくなりました。何とかして区画整理地帯にお地藏さんを残したいという私達の気持ちをくんで下さって、こんな有難いことはありません。」

こうお話しされながら、校長室で八百吉さんから手渡された便箋三枚を紹介しましょう。

藤上八のお地藏様の由来

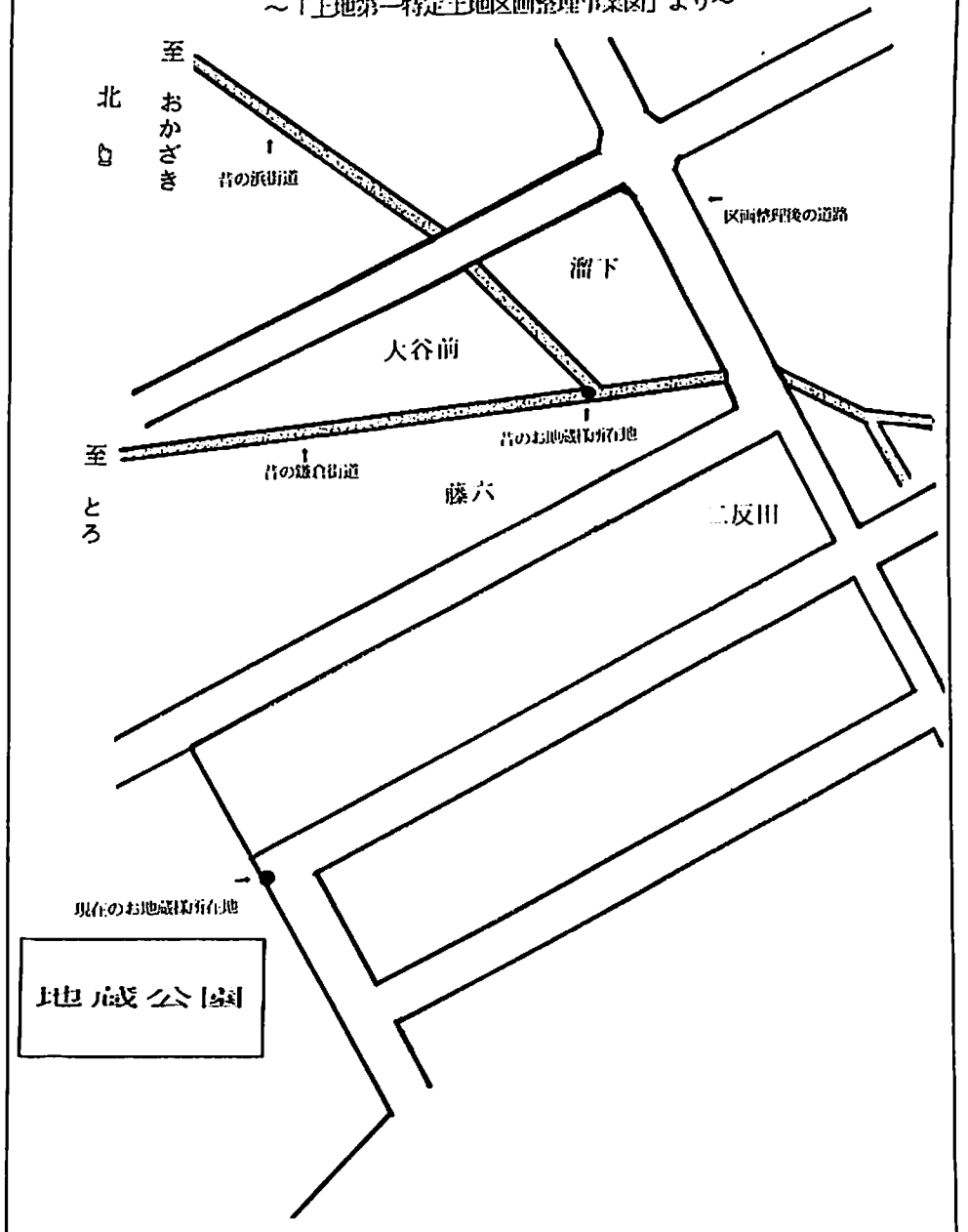
このお地藏様は、私達の祖先が百五十年の昔に建立されたものです。鎌倉街道と浜街道の交わる場所におかさき・ところの道知るべとして雨の日も風の日も立ち続けてこられました。交通安全のお地藏様として庶民に親しまれ、行き交う人々が尊敬し崇拝してきたお地藏様です。

右は、あの有名な勝鬘寺（三河における最初の真宗道場として一二五八年に信願房了海によって創建）を左に見て岡崎城に通じます。左へ向かえば、蓮如上人が創建した本宗寺に通じ、上人分骨の墓や国宝の上地八幡宮、重要文化財の土呂八幡宮があります。そして、町並に出れば、家康が許した「三、八」（さんぱち）で知られる土呂市（とろいち）に通じます。こうした、名勝古蹟を訪ねる人達にはなくてはならない道標でした。

時の流れとともに、世の人達に忘れられていたお地藏様。

藤六のお地藏様所在地

～「上地第一特定土地区画整理事業図」より～



しかし、いくら上地始まって以来の大区画整理事業と言っても、お地藏様を取り壊してしまうわけにはいきません。藤六・二反田・大谷前・溜下地区の字界に立ち、私達の祖先を守り続けて下さったのです。こんな事情から、私達は移転地点と隣接した公園を「地蔵公園」と名付けたのです。

台座も新しくなり、今、お地藏様は公園東の通学路を行く子供たちを見守っていて下さいます。お花、線香、ローソク、よど掛け、お水の世話をされ、お掃除までして下さる心優しいお方のおられることを忘れることはできません。本当に有難うございます。毎日、お地藏様に供えられた美しいお花を見て通学する子供たちは、どんなにか心温まる思いをしていることでしょう。

お地藏様のご移転など手がけた区画整理組合の役員の一員として、皆様から御礼を申し上げたい気持ちでいっぱいです。

平成元年五月十五日

「三」 「右おかさき 左とろ」を確認

～石仏研究家の都築照元先生も同行～

上地ごとの家指導員の都築照元先生は『岡崎の石仏』の著作など郷土歴史家としても知られる方です。お地藏さんの写真や学校だよりの関係資料を持参し、二度三度とごとの家を訪ねては先生のお話をお聞きしていました。

「先ず、おっしゃるように間違いない道祖神でしょう。とにかく、現場へ行ってみましょう。」

郷土史研究で大変ご多忙な中にもかかわらず、同行を快く引き受けて下さいました。十月二十一日の午前でした。上地郵便局前に車を止め、地藏公園に向かいました。

「ああ、きつとあれですね。」

歩を進めながら、遠くに浮かんで見えてきた石仏を指さして言われました。

「さすがですね、都築先生、あれです。いよいよ、先生の鑑定ですね。」

「いやあ。道祖神としてのお地藏さんには、裏側に寄進した人の銘がありません。これが一つの特徴とも言えるんですよ。」

「ええ、確かにありません。風化が進んでいますが、銘は見当たりません。」

「昔の人の謙虚な心が伝わってきますね。決して自分を売り込むような態度が

ありません。旅する人の安全を祈り、一緒に目的地まで歩いて行きましょう、

そんな気持ちでしょうね。いいですねえ。」

下がりかけた眼鏡に手をやる都築先生との会話が続ききました。

秋の陽を浴びて、たたくお地藏様の前に来りました。

この道の専門家、都築先生の「鑑定」が始まりました。

一、道標の判読

右 ざき

左 ところ

(右部分の文字の風化が進み、かすかに「右 ざき」が残って



藤六のお地藏様

います。左側は、「左 ところ」と読むことができました。(

二、お地藏様の合掌

右手に当たる部分が削れてしまい、わずかに合掌の形が見受けられます。これも、道祖神としての特徴の一つです。

三、舟形光背の座像 ※

地藏様の背は「舟形光背」(ふながたこうはい)で、石像全体の長さは四十六センチ、幅は三十七センチメートル。像の高さは三十三センチメートルです。

四、江戸時代後期の作

石仏の風化状況や「右」「左」文字のはね方からみて、江戸時代後期の作と思われる。

右 ざき
左 ところ



高橋由美子教諭による拓本

※道祖神

道路の悪霊を防いで旅の人を守護する神で、日本では江戸寛文(一六六一〜一六七三年)の頃以後に建立され始めたと言われています。

「この像容は単体浮彫(たんだいふうぼり)とも言うんですよ。」

手際よく観察や計測を進められた都築先生が、専門家の目を輝かせて詳しく解説して下さいました。約一時間の同行を頂き江戸の頃、旅の安全を願った上地の人の思いが改めて重く感じられるのでした。

「三」 「子どもたちも野の花を供えていますよ」
「その優しさに胸がじーんときます」

「あその家のおばあさんがいつも花やお水をあげているだよ。」

子どもたちの登校の様子を見ようと、地藏公園近くを歩いていた時でした。通学班で学校に向かう五年生の子たちが話してくれました。機会を見て、そのお宅を訪ねてみようと思いつながらも、しばらく日が過ぎてしまっていました。

十月の下旬。朝、いつもより早目に学校を出て、七時を少し過ぎた頃、とうとうその機会を得ました。

上地町藤六六十の三にお住いの星野ときさん、六十八才です。

「ああ、松原先生ですか。お地藏さんを調べてみえるのは。近所の子どもたちに聞いていましたよ。私は、特別何ということをやってるわけじゃないですけど……。」

朝食後の忙しい時にも拘らず、突然の訪問を快く迎えて下さいました。

「子どもたちに聞きましたが、星野さんは、ずっとお地藏さんのお世話をしてくられたそうですね。そのへんの事情をお話して頂けませんか。」

ぶしつけなお願いに、嫌な顔ひとつせず、

「私も、お地藏さまのすぐ近くに、こうして住まわせていただいていますから、できることをやらせてもらってるだけですけど。」

と、眼鏡の奥の瞳を輝かせながらのお話が始まりました。



星野ときさん

星野ときさんのお話

昔懐かしいお地藏さまです。

でも、今、近所の子どもがとてよく世話してくれて、その気持ちが嬉しいのです。野の草花を摘んできて、それをそっとさしていくんですね。その心持がとてもありがたくてねえ。人に捧げるといふ気持ちが嬉しくてね。私も、そんな子どもたちにひかれて、お参りしてるんです。その草花が枯れるまで、私は次の花と取り替えないようにしています。

何だか、お地藏さんが私達より低い道端におられるので申し訳ないような気がしてなりません。昔の場所にあった時、すでに、雨や風でお顔がすり減ってしまっておられました。それでも、石の芯がしっかりしていたのでしよう、何百年もの間、こうして私達を守ってきて下さったのですね。

同じ上地町藤六に住む子どもたちに聞いてみました。

「うん、知ってるよ、おばあさん。毎日お地藏さんにお花やお水を供えているもんね。」

三年生の稲石浩子さんと梶川由加利さんが顔を見合わせてにっこり笑いました。十月下旬、ぼかぼかと初夏を思わせるような始業前の職員室でした。

「そうか、星野さんって優しい人だね。君たちも何かしてるの？」
待ってましたとばかり、早速、梶川さんが口火を切りました。

「私は、朝、通学班の集合場所に行く時、ランドセルを背負ったままだけど、お地藏さんにおはようってお参りしています。一年生からやっています。きっかけは、お地藏さんのところにローソクがとっていたからだと思うよ。何だか、お参りすると、

「一日中ツイてるみたい。」

隣りでうなづいていた稲石さんが言いました。

「私は、二年生の時からお参りするようになった。お地藏さまがずっと昔からあったっていううわさを聞いてからです。」

私、お地藏さんの顔が、何かニコツとしてるみたいに感じるよ。拜んだり、手を合わせたりますと、気持ちがいいよ。」

職員朝礼の始まる前、わずか数分間の子どもたちとの会話でした。やりとりを聞いていた、校長先生や大井教務主任の顔に郷里の思い出が重なったのでしょうか。

「いい子たちだなあ。」

吐息がもれました。

「右おかさき左とろ」

江戸の時代から百五十年間、風雪に耐え、岡崎・土呂に向かう旅人や上地の人たちの安全と幸せを守り続けたてきたお地藏さま。

心温かな、この子らと共に、更にこれからの幾年月、地藏公園とお地藏さまは生き続けていかれることでしょう。



元気に登校する上地っ子

十、山や田畑ばかりだった上地学区

（五十年前を語る成瀬総代会会長さん）

「上地の山を動かす」区画整理事業も、第一第二地区とも今年の一月と二月に相次いで完成記念の会が行なわれることになりました。

「昼夜を分かつ国道」二四八号線や衣浦線を通り抜ける車の列を見ると、誠に隔世の感がします。」

第二組合の加藤利吉さんが、事業開始の十年前を思い出されながら話されたのは暮も押し詰まった校長室でのことでした。

「百年前の上地は、このふるさとシリーズで取り上げてきたが、上地学区の指導者の方たちの少年時代のこともふれてみたい。」
こうした嶋田校長との会話が契機になって、今号の企画誕生につながりました。

私たちの求めを快諾され、二日間にわたって学校を訪れ記憶をもとに語って下さったのは成瀬司総代会会長さんでした。以下は、その概要です。

「二」 若石松東に人家はなかった

「今の上地学区を見て、会長さんの子どもの頃と比べて大きな違いを上げるとしたら何があるでしょうか。」
大井教務主任の問いが発せられると、昭和三年生れの成瀬さんが静かに話を始められました。

それは何と言っても、土地の様子が全く変わってしまったということでしょう。

奥山田池から西や北側の若松東には人家がなかったと思います。大谷池と奥山田池の間は、高さ五十メートル位の山でした。その山が柱町や今の二四八号線の方にずつとのびていました。信じられないようなこの地域の変貌に目を見張るばかりです。

若松東ばかりではなく、上地地区も私たちの子どもの頃の面影は四区の辺りを除くと、ほとんど残っていないと言えるのではないのでしょうか。山が大谷坂・真虫ケ入・味噌ケ入・小田ケ入・長根・甚九田・善十林・馬乗の一带に連なっていて、現在の二四八号線より西側に田畑が広がっていました。

ですから、道幅も狭く自動車などはめったに見かけることはありませんでした。ただ、上地の荒井で一軒だけトラックのある運送屋さんがいました。福岡町の通りに、タクシー屋もあったと記憶しています。その他には、個人で車をもっているなんてことは聞いたこともありません。

〔二〕馬車や牛車が通り交通事故など全くなし

こんな訳ですから、子どもたちが道で遊ぶのは日常茶飯事で何も珍しいことではなく、交通事故を心配するなんてことは全くありません。車と言えば、荷物を運ぶ馬車や牛車が時々通る程度でんびりしていました。その馬や牛を飼っている農家もそんなにあつたとは思いません。子どもが道で遊んでいるのは、ちっとも不思議なことではなく、ごく当り前のことでした。交通事故などという言葉もありませんでしたから。

道の真ん中に馬糞や牛糞が落ちていて、それは、今思うと風情があつてよかったですね。夢のような上地でした。

側溝や道の修理ということで、町民が「道役」に出て、

鍬やスコップを持って作業していたのを思い出します。道が舗装していないので、長雨などで大きな穴があいたり、溝がゴミで詰まったりしたからなのでしょう。

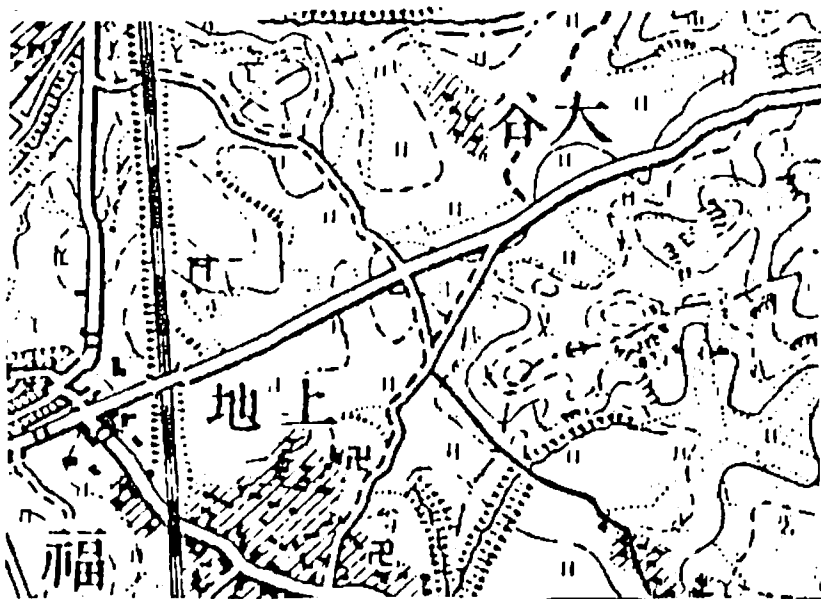
〔三〕ほとんどの家がお百姓

山と田畑だけだったので、上地のほとんどの家はお百姓でした。

「福岡学区小史」（昭和三十三年発行）によりみると、昭和二十六年の統計では上地の戸数が全部で二五九でした。

これは、今の上地一区から四区までの数字がすから、この上地学区の総戸数は百戸以下だったはずですよ。それでも菓子屋が二軒、自転車屋が一軒あつたことは、はっきり覚えていてます。瓦屋さんが六軒あつたのは、やっぱり土地柄でしょうね。これは、良質の粘土があつたからでしょう。

この粘土があつたのは、三善寺の近くで現在青山材木のある辺りの山から掘り出されていきました。



昭和3年「大日本帝国陸地測量部」地図の拡大コピー

〔四〕 水車小屋もあつた

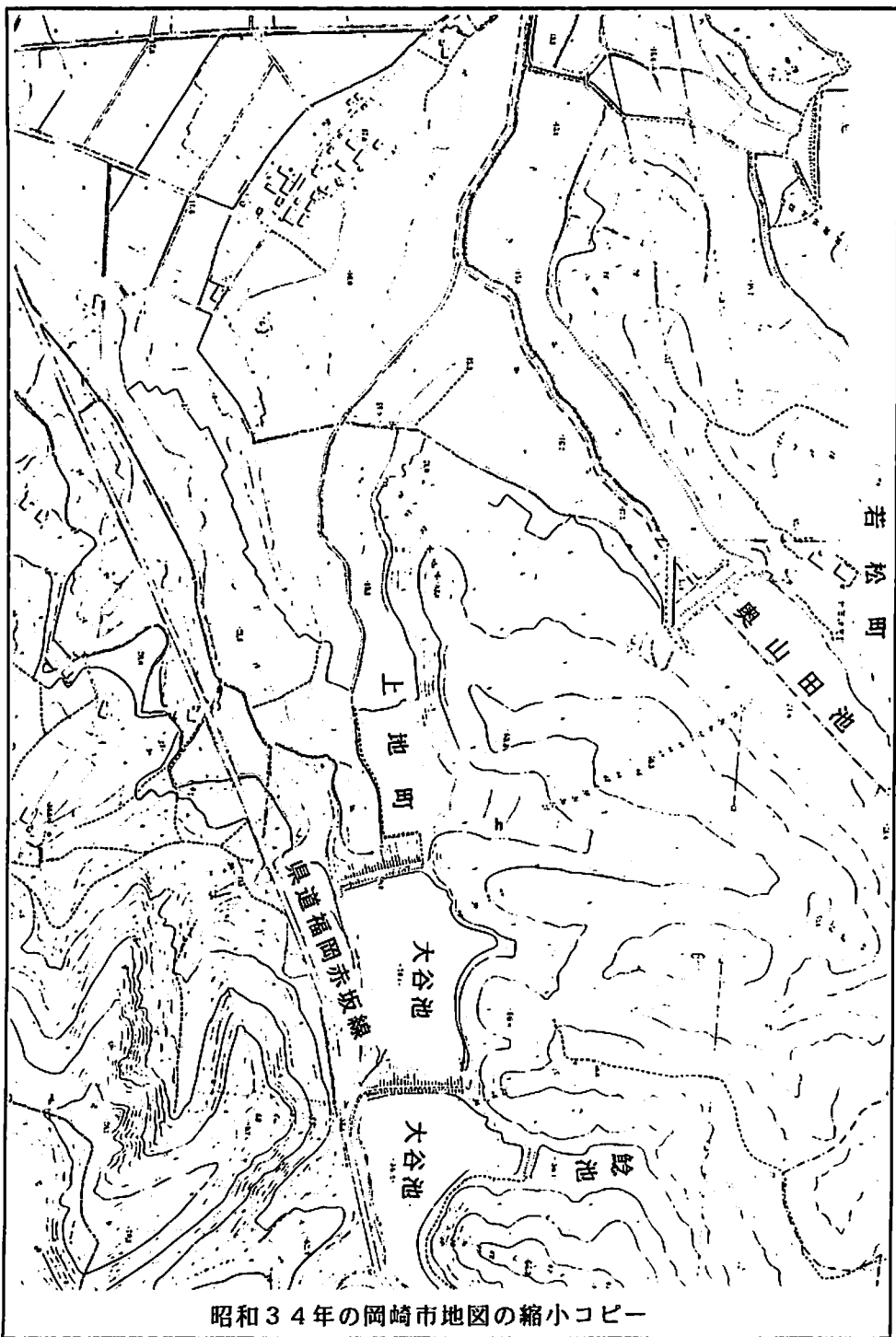
そのほかで記憶にあることと言えば、今と著しく違うものでは井戸だと思えます。水道はもちろんありませんでしたから、飲み水はもっぱら井戸でした。福岡の菅園（かやぞの）の方は土地が低かったので地下二十センチメートルも掘ればすぐ水が出てきたものです。

しかし、上地は読んで字の如しといいますが、ほかより高い所に村がありましたからそう簡単には水が出ません。菅園の方は、すぐ出るかわりに茶色っぽくて濁っていましたね。上地はとつてもきれいな、それでいて冷たい水がたくさん出ました。だから、夏などは畑で取れたスイカを冷やすには、誠に格好の「冷蔵庫」替わりの役目を果たしてくれていました。井戸の水で冷やしたスイカのうまかったことは忘れられません。あの舌ざわりは格別です。

それから、農村地帯ですから、先程校長先生が言われたように、米をつく水車小屋がありました。奥山田池から流れ出していた砂川の流れた利用した水車です。以前、大谷にお住いの上地学区の大先輩である加藤信太郎さんも言うておられましたが、ちょうど今のサークルKや上地園芸のあたりにありました。コットンコットンと心地よい音をたてていました。

今日のように電気によるモーターではありませんので、村のお百姓衆が水車小屋につきっきりで交代で番人を務めたものだと聞いています。夜じゅう米をつく音が、この上地に聞こえていたなんて、当時としては何の不思議もないことでしたが今思うと隔世の感がしてなりません。

十年ひとむかしと言いますが、五十年前ですからね。



昭和34年の岡崎市地図の縮小コピー

五十年前の上地に思いをよせ、話題は学区全域に及び始めました。欲の深い私たちの取材攻勢に、成瀬さんは時折目を閉じて遠くへ行って過去の呼び戻して下さいました。上地の村を馬車や牛車が夕日を浴びながら家路につく風景は、まさに歴史絵巻きのような思いがします。ひっきりなしに車の列が通り抜けていく二四八号線には、水車が回りお百姓さんたちの営々とした歩み、刻まれてきたことも感慨深いものがあります。

やがて、成瀬さんの記憶は懐かしい「餓鬼大将」時代に移っていきました。

〔五〕梅干し弁当かかえて通学子

当時はもちろん上地小学校がありませんでしたから、今の福岡小学校に通っていました。四年生からは男女に別れて、男子組、女子組というふうになっていました。確か学年二学級でした。(福岡学区小史によれば昭和十年の児童数は五四八人と記録されています)

通学服は男は黒の学生服に黒の学生帽、履き物はぞうりかゴム靴か下駄といったところで、ほとんどの子どもはゴム靴だったと思います。村に一人か二人は革靴の子どもがいました。ですから、今でいう「旅行」に革靴をはいて出かけようものなら、豆ができて結局は脱いで歩くといった羽目になってしまったものです。

今のように給食がないので、みんな弁当持ちでした。アルミの弁当箱の真ん中にはいつも決まって梅干しが一個埋まっていた。ですから、どの子の弁当箱も梅干しの所が薄くなったり穴が開いたりしていました。弁当の時間が楽しみです。机の近い者同士でおかずを見せ合って食べたものです。冬は、弁当を何段かに積んで暖めてくれました。中にたくわんが入っていたようものなら、匂ってきて「誰だあ、たくわん入れといた奴は」と言い合ったりしました。

竹輪や鮭、卵焼きといったおかずが多かったように覚えていますが、日の丸弁当が常識でした。腐らなくて昔の人たちの知恵だったのでしょう。

〔六〕先生がこわかったけど学校は楽しかった

小学校の頃、しり上がり(さか上がり)ができなくて苦労しました。上がる瞬間のあのコツがつかめなくて、何べんも何べんも挑戦したことが忘れられません。ほかの運動はできるのに、しり上がりだけがうまくいなくて困っていましたが、という訳か、ある日突然できるようになってほっとしました。体操の時間は今のドッジボールみたいなのが多かったです。と思います。

何にしても、当時は先生がこわかったです。家のおやじさんは「人は話せば分かる」という信念をもっていたようなので絶対に叩くということはなかったものですから、先生が一番こわかったのかも知れません。

剣道の時間に背の高い先生が思い切り頭のとっぺんを「お面ー」と叩くのには参りました。「目から火が出る」とはあのことです。いたずらが過ぎると、教室の窓際の柱にしぼりつけられたりしていましたね。でも、時々新聞やテレビで報道されるような「暴力教師」的なことは全くありませんでした。それでも、今のように「登校拒否」なんてことはありませんでした。学校がイヤという子は一人もいなかったのではないか。それは勉強が楽しみだったということじゃあなくて家におれば田畑の仕事をやらんらんとという事情が大きかったからでしょうね。

福岡にあった映画館に行って友だちと一緒に一日中何回でも映画を見たのが懐かしいですね。後になって分かったことですが、みんな一回や二回は黙って家のお金を「拝借」していたようですね。いい思い出の一つです。

学校で楽しかったことはいくつもありましたが、御坊山での宿泊訓練がありました。松林の中にテントを張って、今流に言えば「キャンプ」ということになりましたか。わずか一泊でしたが、心が浮き浮きしていました。

町内の分団では（通学団や子ども会に当たる組織でしょう）寂靜寺やお宮さんで試肝会（したんかい）がありました。日が暮れてからの肝だめしです。上級生が主役で下級生を仕込むというか、下級生が試されたのです。これは、順送りで、下級生がまた上級生になっていって下級生を仕込むといった伝統です。こうしたことには、親は百姓仕事忙しいので全く手を出さず子ども任せでした。分団ごとにお寺で劇をやったりしたこともありましたが、「クリスマス会」といったところでしょうか。

ベッシャンやビー玉も盛んでした。道端を車が通るわけでもなし、安心して暗くなるまで遊んだりしていました。何箱ベッシャンがたまったとか、ビー玉がどれだけになったとか自慢し合ったりして、とにかく外で遊ぶのが多かったですね。県道も舗装してなかったぐらいですから、農道は石ころだらけのこぼこ道でした。風が吹けば、砂ぼこりが立っし、雨が降ればどろんこといった具合です。それでも、自然がいっぱいで何ともいい環境でした。

大谷池や奥山田池を水源とする川や用水でポンツクをするのも男の子の遊びから忘れることはできません。用水をせき止めて、水をからっぽにしてしまう「かいどり」「かいほり」は楽しかったです。フナやドジョウ、ウナギやハエ、時には大きなコイもナマズも、まあ何でもいましたね。体中、顔までどろだらけになって魚を追ったものです。今の何倍も魚がおったのではないのでしょうか。

〔七〕 道ばたが遊び場

昭和十年度		尋常科第四学年	
明	登	出	成績表
日	年	席	一
二月	尋常科第四学年ノ課程ヲ修了ス	四月	五月
五日		六月	七月
		八月	九月
		十月	十一月
		十二月	一月
		二月	三月
		合計	
			合計

昭和10年福岡尋常高等小学校発行の教育手帳（通知票）コピー



地図を見ながら50年前を語る成瀬司さん

〔八〕大谷池が泳ぎ場所

夏の楽しみは何と言っても水泳でした。パンツ一枚で、わいわい言いながらみんなで大谷池の下の池まで歩いて行きました。自転車などはなかったので、みんな歩きでした。

水泳パンツなんてなかったので、誰も「フルトン」でしたよ。それが当り前になっていました。それでも、女の子はそれなりにちゃんとおったじやあないですかね。泳ぎができるようになる前は、池の岸近くを歩いて、上級生の泳ぎを見よう見まねで覚えていきました。大谷池は「スリパチ池だから危ないで気をつけよ」と言われていたので、子どもなりに慎重だったと思います。いきなり、深みに入って行くなんてことはありません。

私たちの目標は、大谷池の横断往復でした。百メートル以上もある池を行って帰ってくることです。池の真ん中へんの深さは八メートルはあったと思います。真夏でも底のほうは冷たくてヒヤッとしてました。池の周辺の浅い所で散々練習してから「横断往復」に挑戦しました。

その途中で疲れると、クロールをやめて背泳ぎになって「へそ天」になって空を眺めておりました。あの時の空の青かったことは、今でもはっきり思い出します。いい気持だったです。

上地の子どもたちにとって絶好の水遊び場でした。それでも、こうして子どももばっかりの冒険でしたが、溺れて死んだということは聞いていませんから不思議です。本当に「よき時代」でした。

「自分の子どもの頃と重なり合って懐かしさで胸がいっぱいになりました。」「成瀬さんのお話をお聞きして、改めてこの上地を見直してみたくまりました。」大井正之先生や長坂信一先生の言葉が耳から離れません。

(文責 松原 暁三)

△校長氏通信(創作童話)▽

十一、『上地の馬かけ』

むかしは、田や畑をたがやすのに、馬や牛を使っていました。また、にもつを運んだり、人を乗せたりするのに、馬はなくてはならない動物でした。

ですから、村の人たちは、馬をとんでもないじにしていました。それだけに、いい馬をもった人は、それをいつもじまんしていました。

「この村じゃ、わしの馬が一ばん速いだぞ。」

「なに言うだ。おれの馬のほうが速いにきまっとるが・・・。」

「おまえたちは、おれんとこの馬を知らんなあ。足は速いし力はあるし。」

よるとさざると、こんな言いあらそいです。そして、さいごにはいもけんかになってしまいます。

「どうだ、いつまでも言いあっておってもしょうがない。馬を走らせて、

どの馬がほんとうに速いかきめることにしよう。」

「それはおもしろい。」

「そんならもんくはないな。」



6年 成瀬郷子

こうして、「馬かけ」をすることになりました。

その日は朝早く起きて、馬にニンジンやわらをいっぱい食べさせたり、体をマッサージしたり、一生けんめいです。

「さあ、馬に乗ったら、ここへ並んで並んで・・・」
若い人が馬に乗って、むちをふり上げます。

「いいか。たいこの音で走るだぞ。用意——。」

ドン ドン ドーン
さつとむちを当てると、一せいにとび出しました。

「それ行けえ。」

「負けるなあ。」

ビュンビュンむちが鳴ります。パツパツと砂けむりが上がります。

赤や青ののぼりをふっとうえんする人。こうふんして走り出す人もいます。

ところが、そのころ急にかみなりが鳴り出しました。

ゴロゴロゴロ ビカビカビカ

ゴロゴロゴロ ビカビカビカ

びっくりしたのは馬たちです。とびはねて乗り手をふりおとして、四

方八方へにげて行ってしまいました。

しばらくして、かみなりがやみました。

りこうな馬は、ちゃんと家へ帰っていましたが、あわてんぼうの馬は、道をまちがえて、山の中へにげこんでしまいました。

「おおい。とめさんとこの馬がゆくえ不明だ。みんなでさがしてくれや。」

暗くなってしまったので、村の人がたいまつをたもって大谷坂の方へ行って見ました。そうしたら、がけの下にうずくまっていた。がけから落ちて足を折ったらしいのです。

「しようがないなあ。みんなでかついでやるか。」

「やあ、これは重いなあ。」

「わっしょい、わっしょい。」

大せいで馬をかついで、やっとこさ帰ってきました。

こんなことがあってから、人も馬も山の方へは近ずかなくなりました。でも、馬かけはおもしろいので、毎年やっています。

まだ

まのり

くまいず

今でも上地町に「馬出し」（福岡学区）、「馬乗」、「馬不入」とい

う地名が残っています。



6年 成瀬郷



6年 成瀬郷子

十二、春を待つ植物 子ども見つけた春

青木 純

〔一〕 校外を歩いて

失いしあまたの花弁街路樹の赤き山茶花（ささんか）ゆつくりと散れ

立春の翌日、夜に降った雨もあがり、「光の春」と呼ぶにふさわしい日差に誘われて、子どもたちと春を探しに戸外に出て行きました。

ちょっと眺めただけでは、セイタカアワダチソウやススキ、イネ科の植物の立ち枯れだけが目につく空き地や土手にも、確実に春が近くまでやってきていることを感じました。

枯れた茎の横に、新しい株を育てているセイタカアワダチソウ。ロゼットがふくらみかけているハルノゲシ・アレチノギク・オニタヒラコ・チチコグサモドキ・アレチマツヨイグサ。白いかれんな花をつけているタネツケバナやナズナ。青紫色がきれいなオイヌノフグリ。紫色のつぼみをふくらませているホトケノザなど、外に出なければ知ることのできない春を、たくさん見つけることができました。



タネツケバナのつぼみ
(青木 純)

二月五日（月）に先生と学校の外の草花を見に行きました。

南門のすぐそばに白い小さな花が咲いていました。それはハコベの花でした。田んぼの所へ行ったらまた白い花が咲いていました。タネツケバナでした。そこからもう少し行くと、ホトケノザがありました。もうちょっとで花が咲きそうでした。わたしは、早くどんな花か知りたいので、早く咲いてくれなかなあと思いました。田んぼの近くの空き地には、タチイヌノフグリがあり、もうすぐ青むらさきの花をつけそうでした。

大谷公園に向かっていている時、かれたセイタカアワダチソウをたくさん見つけました。キクと同じように、かれたら新しい目が出てくることを、先生に教えてもらいました。その近くの空き地には、青々としたクローバーが広がり、すぐ横には、タンポポがもう咲き終わって、わたげになっていました。

大谷公園について、最初に白い花をつけているナズナを見つけました。その横には、黄色の花をつけているノボロギクがありました。去年の春に外へ観察に行ったとき、ノボロギクは毒があるということを、先生に教えてもらいました。

大谷公園は落ち葉でいっぱいでした。トイレの横の草むらで、オオイヌノフグリを見つけました。青むらさき色で、とってもらいました。とってもらいました。すぐそばにセイヨウタンポポもありました。



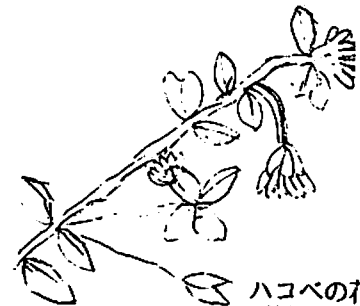
オオイヌノフグリの花
(小島 照子)

わたしは、早く春になってほしいと思いました。

三年 中山 葵

☆ 学区で花をつけていた雑草

二月 五日(月)		天気	晴れ
1	タネツケバナ(白)	田	
2	ホトケノザ(赤紫) もうすぐ咲きそう	田の近くの空き地	
3	タチイヌノフグリ(青紫) もうすぐ咲きそう	田の近くの空き地	
4	ナズナ(白)	大谷公園	
5	ノボロギク(黄)	大谷公園	
6	オオイヌノフグリ(青紫)	大谷公園	
7	ハコベ(白)	上地小南門前	
8	ウシハコベ(白)	大谷公園	
9	セイヨウタンポポ(黄)	大谷公園、空き地	
10	スズメノカタビラ(白)	上地小南門前	



ハコベの花
(鍵山 恵)

スズメノカタビラの花は二月頃から咲きはじめますが、残りの雑草は三、四月頃から咲き始めるのが普通です。今年の冬は

あまり寒くないのでしよう。いつもより早く春がやってきているようです。こんな時、わたしたちより敏感に春を感じる植物をウラやまししく思ったりもします。

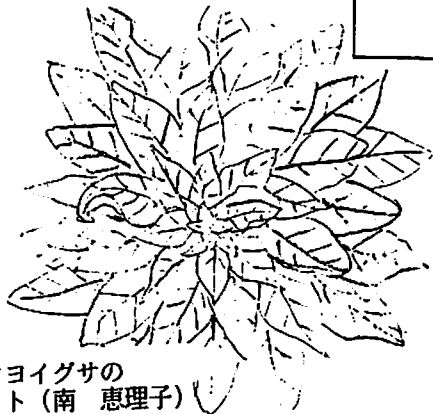
「二」 ロゼットで冬を越す雑草

黄泉(よみ)の国にあらざりしこ咲く花はホトケノザなる紫の唇

ロゼットとは、道ばたの枯れ草の間などで、葉を車状にひろげ、地面にびったりとくっつけて冬を越している植物の様子をいいます。その形が「バラ(ローズ)」に似ていることから、「ロゼット」と呼ばれるのです。

冬の寒さに耐え、少しでも多くの太陽の光を受けるように、葉が重ならないように広がっている様子が自然の仕組みの偉大さ感じます。

ロゼットで冬を越す草には、二年草(越年草)の多くや多年草に見られます。これらの草の多くは、春から夏に茎を高く伸ばして花を咲かせますが、タンポポのように、ロゼット状のままになっている草も中にはあります。



オオマツヨイグサの
ロゼット(南 恵理子)

オニタビラコのロゼットを田んぼの近くで見つけました。ロゼットは少し大きく広がっていました。

☆ 学区で見つけたロゼット

ハルノノゲシとアレチノギクのロゼットは、田んぼの近くの空き地にありました。スイバやオオマツヨイグサのロゼットは、赤や青の葉っぱをつけていました。チチコグサモドキのロゼットは広がってきていました。ススキは枯れていました。セイヨウタンポポはもう咲き終わって、枯れているものもありました。いろいろなロゼットが早く大きくなって、花をつけてほしいなあと思います。ススキも春になって、緑色の草になるのが楽しみです。

三年 大島加菜子



チチコグサモドキのロゼット (居福 涼子)

二月五日(月)

天気 晴れ

6	セイヨウタンポポ	空き地の土手
5	チチコグサモドキ	空き地
4	スイバ	空き地の土手
3	アレチノギク	田の近くの空き地
2	ハルノノゲシ	田の近くの空き地
1	オオタバコ	田の近くの土手

9	ナズナ	田
8	コオニタバコ	田
7	オオマツヨイグサ	空き地の土手

③ 校内の木・草花・雑草

まだ固き銀の辛夷(コブシ)は眩(まぶ)しくて光のなかの汝(なれ)をとりだす

① 木・草花

カンツバキの赤、パンジーの白や黄や紫だけが目につく学校の木や草花。しかし、よく見ればあちこちで春を待っているものたちを見つけることができます。一度、学級で校内の「春さがし」をしてみませんか。

私は、学校に咲いている花や木の様子を中心に調べました。

パンジーは、佐野先生が早くから種を育ててくれたので、あちこちの花だんでたくさんの花をつけていました。

デージーもブレハブの南がわやえんぴつとうの所に咲いていました。

はじめて見た時、この花はきれいな花だな、と思いました。



パンジーの花 (梶村智英)

カンツバキは、なかよし池のまわりや体育館の東側にあつて、花がいっぱい咲いていました。下にはちった花びらがいっぱいありました。
ヒイラギナンテンは、先生方のげんかんの北がわにあり、もうすぐ黄色の花が咲きそうでした。キクはブレハフの南がわにあり、枯れていましたが、その下から、またわかい芽が出ていたので、ふしぎだなと思いました。

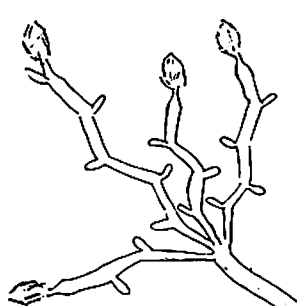
つぎに、まだ花や葉をつけていない木の様子を調べてみました。
北と南の校しゃの間に植えてあるアジサイは、冬芽がまだ固いものもあれば、もう芽が開きはじめて、葉の様子が分かるものもありました。

体育館前のハナミズキは花芽がふくらんでいて、アサガオの種にっていました。

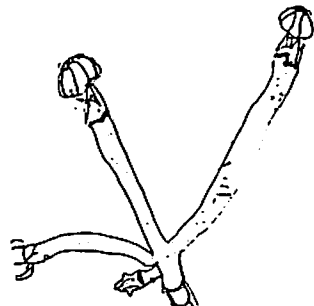
コブシ(辛夷)は南門のすぐそばにあり、芽は銀色にかがやくあたかそうな毛でおおわれていました。じゅ業の時、先生が芽を切って、わたしたちに見せて下さいました。芽は二重に守られていて、その中には小さなコブシの花がありました。

サクラの葉芽と花芽はまだかたいです。早く四月になってサクラの花を見たいです。

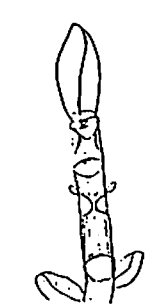
三年 大林 佳央里



コブシの芽 (中根絵美)



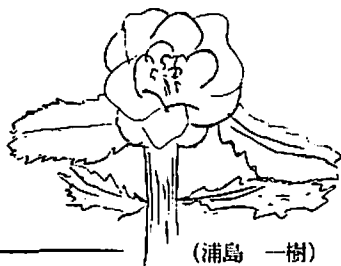
ハナミズキの葉芽 (大塚 智士)



アジサイの葉芽 (野本 真行)

☆ 校内に咲いている花(雑草は含まない)

	二月五日(月)	二月 八日(木)	天気
1	パンジー(白・黄・紫)	花だん	晴れ
2	デージー(赤)	花だん	
3	カンツバキ(赤) 落花盛ん	なかよし池、体育館東など	
4	ヒイラギナンテン(黄) もうすぐ咲く	職員玄関前	
5	ウメ(赤・白) 白はもうすぐ咲く	体育館前	
6	ジンチョウゲ(白)	体育館前	
7	ロウバイ(黄) 咲き終わったところ	体育館前	



カンツバキの花 (浦島 一樹)

② 雑草の様子

校内に生えている雑草も、学区の雑草と同じように、花をつけ始めたもの、ロゼットが広がっているもの、春を感じさせるものばかりです。

カンツバキ・ウメ・ロウバイなどの花木や、花だんの花のように派手ではないのですが、雑草がかれんな花をつけていたりすると、すごく感動を覚えます。

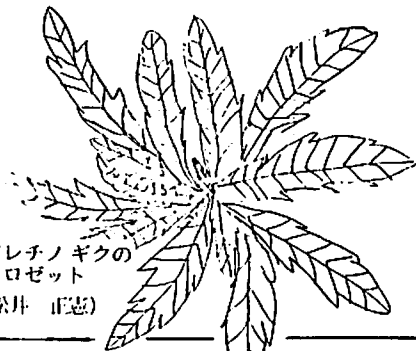
二月五日(月)に理科の授業「きせつと生きもの(冬)」で、草や花や木を見に行つて、わたしはとくに雑草を見て、「きせつと生きもの(春)」とくらべてみることにしました。

ブレハブの南に、セイヨウタンポポが咲いていました。わたしは、まだ二月なのに、早く咲いているなあと思いました。スズメノカタビラは白い花がちょうどいい感じで咲いていました。ハコベは白い花がつき始めていました。もっといっばい花が咲けばいいのになあと思いました。ミミナグサは、もうすぐ咲きそうでした。図かんで調べたら、ハコベとミミナグサは、同じナデシコ科の雑草でした。

ハルノゲシは、五月のときには黄色い花が咲いていて、六月には枯れていました。二月は、まだロゼットがあまり広がっていません。

オニタビラコやアレチノギクも、同じようにロゼットになっていました。

タネツケバナは、くきや葉はむらさき色がかっています。くきは細くて弱いので、少しの風でも大きくゆれるそうです。今は白い花が咲いています。ノボロギクは、もう、黄色い花が咲いています。五月の時にも咲いていたので、いつまで咲くのかちょっとふしぎです。セイタカアワダチソウは、枯れた葉をすてて、若い新しい葉っぱを出していることが分かりました。スズメノエンドウは、前はあまりつるがのびていなかったけれど、だいぶ長くなってきていました。



アレチノギクの
ロゼット
(松井 正志)

わたしは、草には、おじいちゃんの葉っぱとわかい葉っぱがあつて、落ちていらつたおじいちゃんの葉っぱはかわいそうだけど、またわかい葉っぱが出てくるから、おじいちゃんの葉っぱもうれしがつていふといふことのへり返しをしていることが分かりました。

三年 落合登輝子

この部分は、落合さんが植物の生活史を、自分のものとして捕らえる力が身につけていることを読み取ることができず。

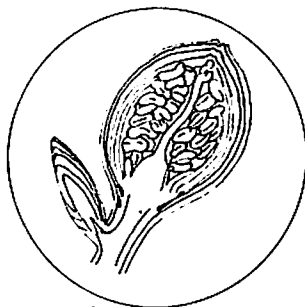
〔四〕 春を待つ植物

軽やかに汝は光の香を射る春泥かわく校庭のすみ



一雨ごとに、着実に春が近づいています。今の雨は、もう冬の冷たい雨ではありません。今の草木は、雨や光をその体に取り込み、怠りなく春になるための準備をしているので

す。
学校のコブシ、ハナミズキ、サクラが花をつけ、校庭の隅や学区の空き地や土手に、タンポポ、オオイヌノフグリ、ヒメオドリコソウ、ホトケノザなどが咲く日は、もうそこま



ツバキの冬芽

二月は「光の春」。

十三、大谷公園へ野鳥ウォッチング

（暖冬の山に十八種を確認）

「暖冬で、すでにヒバリやウグイスの声が聞こえ、梅やタンポポの花も見かける。三月二日には桜の開花予想も発表と、いよいよ春本番……」

これは、三月一日の朝日新聞「きょうの天気」の記事です。

「先週の日曜日にも大谷池にカルガモを見に行ってきましたが、一匹も発見できませんでしたよ。」
と、科学部担当の青木先生。

「この暖冬で、もう姿を消してしまったのかねえ。」

「いやあ、区画整理組合完成式の祝砲に驚いて行ってしまったのじゃないか。」

職員室での野鳥談議は、例年大谷池や奥山田池に群れをなして飛来するカルガモの数が、激減している原因にふれながら熱を帯びてきました。「昨年発行の「ふるさと上地」三十五ページには、「上地に集まる野鳥」の取材記事としてカルガモ百二十羽が記録されています。」

「科学部の子たちで今年の大谷池へ出かけてみたらどうだろう。」

「大門小学校の鈴木重則先生が野鳥に詳しい。」

「あの先生は、小鳥の声だけで名前が分かってしまう。」

こんな経過があつて、いよいよ、平成二年晩冬の大谷公園野鳥ウォッチングが決まりました。以下、ウォッチング同行の記録を

紹介します。

一、大門小学校の鈴木重則先生を講師に迎えて

二月二十八日（水）午後三時の上地小学校サンクガーデンです。十分前に到着されていた鈴木重則先生が、集まった科学部と五年生一組の子どもたちを前に柔らかな笑顔で語り始めました。

「どんな野鳥がこれから発見できるか楽しみですね。シジュウカラはきつとおるよ。先生の財布と一緒にシジュウカラ（いつも空っぽという意味もあります）か。分かるかな？」

初対面の先生が発したギャグを通じたのか、四十人を越える部員の中で小さな笑いが起きました。さて、一行は南門を出て、一直線に標高六十メートルの大谷の山へ出発しました。

「第一号、ムクドリだよ。」

上地子どもの家西側の軒下に住み着いているムクドリが電線で羽根を休めていました。それをすかさずとらえた鈴木先生の声です。

「ムクドリはねえ、公園や神社、郊外の森などにいる普通の鳥で、秋から冬にかけては大群で畑に降りて害虫を食べてくれるから

益鳥なんだね。」

「よう肥えているねえ。」

「すごい太い体してるね。」

鈴木先生の回りでは早速子どもたちの素直な感想がにぎやかに飛び交っています。

「あれ、カラスだ！」

四年生科学部の子が空を見上げてて叫びました。

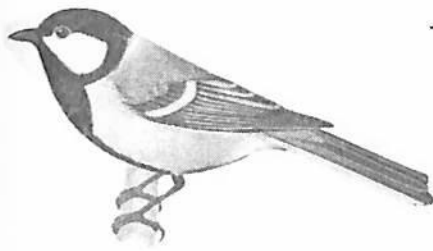
「何だ、カラスじゃん。」

カラスなら知ってるよ、そんな気持がこめられた反応に鈴木先生の優しい解説が加えられました。

「あれは、ハシボソガラスって言うんだよ。ゴミだめの残飯整理もしてくれるし、家畜の死がいにも群がって片付けてくれるんだよ。」



ムクドリ



シジュウカラ

子どもたちが、もう一度空を見上げた時には、ひとつがいのハシボソガラスは大谷の山に吸い込まれるように消えていました。
ピーピー。ヒヨドリがかん高い鳴き声を残して、勢いよく空を蹴っていきます。特徴のある飛び方をとらえた鈴木先生が、大谷公園の入り口で話を続けられました。

「今の飛び方はスースーと勢いをつけながらっていう感じだね。野鳥はみなそれぞれに特徴をもっているんだよ。これから、山の中に入っていくんだけど、こんなことに気をつけながら観察するとよく分かるようになるよ。」

子どもたちの鉛筆がノートの上をいそがしく走ります。

1、大きさはね、スズメやハト、それからカラスなどと比べて覚える
とよい。(スズメより少し大きいとかいう言い方で)

2、どんな鳴声をしているか、木をつつくような音だとか、チッチだとかというように聞き分ける。

3、体の格好が青木先生のようにスマートとか、私のようにずんぐりムックリだとかいうように思った印象をはっきり記録する
といいね。

4、動き方で例えば、ハトは首を振りながら足を交互に出して歩くね。セキレイはおっぱをビッピとはねるでしょう。

一、カワラヒワなど次々と山中で確認

更に、鈴木先生の入山前のお話が続きます。

「みんなは、今から山の中や池の鳥を探しに出かけます。一生懸命耳をすまして鳴き声を聞こうとしていますね。また、双眼鏡なんかを使って、鳥に見つからないように遠くから観察しようとしています。しかしねえ、鳥たちは、もうすでに、みんなを発見しているんだということを忘れてはいけませんよ。」

家から持ってきた双眼鏡を胸にぶらさげている子、学校の双眼鏡を見合っていた子、それから、同行の大井・長坂・稲垣・青木四人の先生たちが、新装なった大谷公園の青・黄・桃・白のカラフルなトイレの東側から山に登り始めました。

大谷の山を一周すると一キロメートルは越すと思われる遊歩道(園路)を伝って四十人のウオッチング隊が列を作って進んでいきます。総階段数は四百六十余段、一か所で六十段を越すコースもあります。

「先生たちの額には、うっすらと汗が見えます。」

「この向こうには、千年前の窯跡もあるんですよ。」

と、ご説明すると、

「この地方は幸田とつながっていますからね。古い歴史をもった山です。でもいいですね、こうやって上地小学校では、子どもたちと先生と一緒に授業後のひとときを散策できるのは……。」

鈴木先生が、山の繁みに目を移しました。

「あ、あれはキジバトだ！」

「しっ、そんな大きな声を出しちゃあ。」

「大丈夫、まだ飛んでいきやあへんじゃん。」

山の中腹で、松の木の頂上近くの枝にとまっていたキジバトを見つけた子どもたちが興奮気味に話はずまっています。

昨年、野鳥クラブの子どもたちの手で取り付けられた巣箱がいくつも残っていますが、住み着いた形跡はまだありません。シジュウカラの巣箱入りも期待していたのですが、そこまでの道のりはまだまだ遠いようでもあります。

「今の羽ばたきは、シジュウカラですよ。ちゃんといえますね、やっぱり。あの鳥は、石垣の間とか木の穴、家のすき間にまで巣を作り、たくさんの羽毛を敷くんですよ。」

と鈴木先生。

鈴木先生の耳の良さに驚いていると、雑木林の頂上付近では、ツグ



大谷の山で野鳥観察する上地っ子たち

ミが姿を見せてくれました。もうすでに、六種類の発見です。

「あれっ、今のはアオジですね、あの声。」

耳を澄まして、先生の指さした方向に瞳をこらしてみましたが、もう、時すでに遅しでした。後で調べてみると、

「ホオジロ大で上面は暗緑色、下面は緑黄色。本州では中部以北の山地帯で繁殖し、西日本からは繁殖の記録がない。冬季は群れとなって積雪のない暖かい地に標行してくる。山ろく、村里付近の低木林や市内の庭先などにも見られる。」（標準原色図鑑）とあります。目下、上地の地に漂行中といったところなのでしょうか。

「先生、何か声があったようだけど、コロコロって。」

五年生一組から参加した女の子が、鈴木先生にそっと尋ねました。サンクガーデンを出発してからこの子たちはずっと鈴木先生に「密着取材中」といった熱の入れようです。聞き耳をたてながら、注意深く辺り一面に視線を投げかけていた鈴木先生が言いました。

「ああ、よく気がついたね。すごい。あの声はね、キリキリコロコロって言ったね。松の実が大好きなカワラヒワだよ。先ず間違いないね。」

「カワラヒワ？初めて聞いた名前。」

「どんな格好してるの？カワラヒワって。」

まだ見たことも聞いたこともないのでしょ。子どもたちの関心が更に高まってきました。鈴木先生の解説が、回りを囲む子どもたちの中にしみ込むように入っていきます。ピーピー。ヒヨドリが首を伸ばしてさえずっています。



アオジ



カワラヒワ

「あとからね、その図鑑で詳しく調べておくといいよ。あんまり正確じゃあないかも知れないけれどちょっと説明しておこうかね。」

「うん、聞かせて。」

「カワラヒワはね、そう珍しい鳥じゃあないんだよ。北海道から九州までほとんど各地にいる鳥でね。巣は大抵、平地やこういう低い山の木の枝にかけておるだよ。細い木の根っこや木の皮、それから道端に落ちている紙くず、綿、犬や猫の毛なんかを巣の中に運び込んだりしているんだよ。それを巣の中に上手に敷いて卵を育てるって言われてるんだけどな。」

メモ用紙に忙しく子どもたちの鉛筆が走ります。大井先生の持つテープレコーダーも順調に作動中です。長坂先生が盛んにカメラを向け、シャッターチャンスをうかがいますが、野生の鳥たちの動きが激しく、なかなか困難を究めているようです。

「もう、これで確か八種類になりましたね。」

青木先生がこれまでの記憶をたどりながら、指を折っています。

「九種類だよ。先生。」

「どうして、アオジ、カワラヒワだろう。だから八つだよ。」

「何で、ススメだって仲間に入れないと。」

「ああ、そうか。それなら九種類になるね。」

こんな会話が進む中で、上空を口ばしの太いハシブトガラスのつがいが東に向かって行きました。これで、総計十種類に達し、山中から大谷池に降りて行くことにしました。

二、マガモのつがいも泳ぐ

高橋由美子先生書による「完成記念」碑が、前夜の雨に洗われ、くつきりと公園の一角に浮び上がっています。

「十六年間の事業がやっと完成して、本校の高橋由美子先生が、この記念碑の字を書かれたんですよ。」

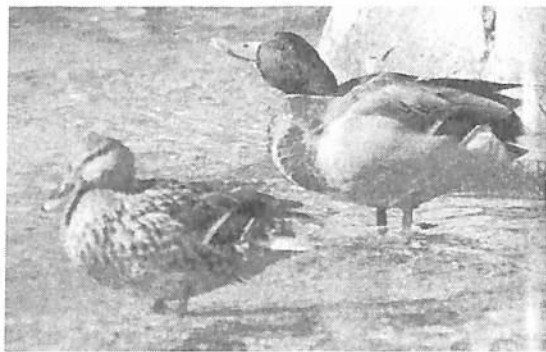
と、除幕式を二月二十四日にすませたばかりの事情を鈴木先生に説明していると、上の大谷池観察の先発に行っていた四年生の男の子たちが走って来ました。

「今日は何もないみたいだよ。」

残念な報告です。やっぱり、区画整理事業完成式の祝い花火のさく裂音に野鳥たちが驚いて飛び去ってしまったのでしょうか。それでも、折角ここまで来たからということ、上の池まで行くことに決まりました。

「さっきも四十センチ級のブラックバスを釣った。」

ルアーに挑戦中の四人の高校生が、双眼鏡や望遠鏡を手にした私たちに釣果を語ってくれました。昨年夏の一メートルの大鯉確認に続く大型ブラックバスの情報です。



マガモ (左メスと右オス)



カルガモ

衣浦線に沿った東の端に何か鳥らしいものがあります。じっとして、動かないため学校のニコンフィールドスコープに頼ることになりました。

「あれ、動き始めた。鳥だ。カルガモだ。やっぱりまだおったー！」
科学部顧問の青木先生が小躍りして叫びました。

「ねえ、みんな見てごらん、順番に。今、セットしたからね。あんまり動かないから、きつとよく見えるよ。」
期待通りのカルガモ発見に子どもたちが次々とフィールドスコープをのぞき始めました。にぎやかな声に気づいたのか、羽根を休めていたカルガモが岸の繁みから姿を現わします。

「三、四、五……向こうの葦の方にも、やっぱりいたね。」
しかし、去年の同時期に比べたら激減と言える数字です。

「はつきりとは言えませんが、これは暖冬のせいでしょうね。野生の生き物は季節というか気象というか自然に敏感ですからね。きつと、この大谷池より、今の時期ではもっといい場所を見つけているんでしょうね。」

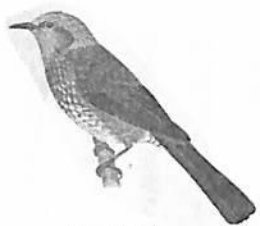
鈴木先生が、隊を組んで上地配水場の上空に飛んでいくカワウの群れを見上げながら説明を加えて下さいました。護岸工事のコンクリートの上をハクセキレイが尾を振りながら餌を探して動き回っています。

学校への帰途、電線にとまっていたタヒバリに双眼鏡を向けながら奥山田池に立ち寄ってみました。勤労福祉会館側の排水口付近に色の鮮やかな鳥が浮かんでいます。早速、スコープのセット。

「間違いなく、マガモです。あの頭の部分がきれいな緑色をしているのがマガモのオスだよ。」
と、鈴木先生。

「わあ、すごいきれい。初めて見た。カルガモより色が美しい。」

二、校長通信



ヒヨドリ

元氣よくヒヨドリが、バタツバタツと羽根をふりながら飛んでいく。

まるで、空を自分の物のようにして飛んでいく。

あんなふうには、一回でいいからほくも空を飛んでみたい。

あのバタツという音が気に入ってしまった。

足でリズムをとっているのだろうか。」

五年生の花田君が胸おどらせて書いています。

(松原 記)

「ああ、見えなくなっちゃった。よう動くねえ、こっちへ向けて。」

マガモのオスが茶褐色のメスを従えて北へ南へと向きを変えるたびに、子どもたちの歓声が起こります。午後五時、カイツブリが餌を求めて水中に口ばしを突っ込んで羽根をばたつかせているのを見ながら、この日の大谷公園野鳥ウォッチングを終わりました。しめて十六種の野鳥確認の成果をもって幕となりました。

「鈴木先生の望遠鏡は特によく見えた。ずっと遠くにいる鳥たちが目の前に見えた。感激でポーとしちゃった。」

「今まではスズメだスズメだと思っていた鳥が、実はツグミだったりムクドリだったりでした。今日の野鳥観察で私は、鳥が好きになってしまいました。」

「ヒヨドリやセキレイなどの色々な鳥の鳴き声や姿が分かって、とってもいい勉強になりました。自然をもっともっと大事にしていかなければいけないことが分かった。」

「この次の時は、テープレコーダーを持って行って完全装備で行きたいなあと思った。」

これは、六年生の前山さん、五年生の杉田さん・小林さん、四年生の深水君たちの感想ノートの一節です。

「ピーピー。」

一、朝の路上で

その一 おねえさんありがとう

Sさんは、上地小学校の卒業生で、今、中学二年生です。

四月のある朝、Sさんが学校へ行くときのことです。

小学校三年生の女の子が顔色を変えて走ってきました。見ると同じ町内の子です。

「ねえ、△△ちゃん、どうしたの？」

「国語のノート忘れちゃった。取りに行くの……。」

同じ班の女の子は、時間が来たので、△△ちゃんがノートを取ってくるまで待っておれません。行ってしまいました。Sさんは、その子が心配になりました。

「私がここで待ってあげてね……。車に気をつけて行っておいで。」

△△ちゃんは、安心して家のほうへ急いで走って行きました。

Sさんが、道端で待っていると、友だちが通って行きます。

「どうしたの、Sさん。早く行かんとおくれるよ。」

「八時までに行けばいいでしょ。」

「八時から始まる『朝の学習』におくれると、叱られるよ。」

「うん、でも本当に始まるのはいつも八時五分ぐらいだよ。」

十分ほど待っていると、△△ちゃんがハアハアいつて走って来ました。Sさんがいたので、ニコニコしています。

「ねえ、あんた、これから忘れ物しちゃうダメだよ。夜、寝る前にきちんとそろえておくれだよ。」

Sさんは、手をつないで歩きながら、やさしく教えてあげます。

「それでも忘れることがあるから、朝、ランドセルをしよう前にもう

一回見るんだよ。分かった？あわてて取りに帰ると、危ないでね。」

「うん、分かった。」

女の子は、すなおに聞いてくれたので、Sさんは安心しました。

「あの建物は、自動車学校だよ。」

「ふうん、じゃあそれは。」

「あつ、刑務所だよ。」

「ふうん……。」

こんな話をしているうちに、学校の近くへ来ました。

「さようなら、もう忘れちゃあかんよ。」

「おねえさん、ありがとう。」

女の子は門の中へ走っていききました。

(Sさんとは西村志保さんのことです。)

大きい子が、小さい子の手をつないで登校します。ただ歩くだけではありません。



6年 藤原 真弓

「今日は、歌を歌っていくよ。今度の集会で歌う『星の世界』だよ。」

「あ、きのう習ったのだ。」

「そうだよ、いちにのさん、ハイ。」

かがやくよぞらの ほしのひかりよ

まばたくあまたの とおいせかいよ

と、朝のきれいな空気の中に、歌声がひろがっていきます。

「もう、みんなおぼえたね。」

「うん、二番まで歌えるよ。」

こんな班もあります。

「きのう、先生から聞いたでしょう。もし、へんなおじさんがおつたら、そはへ行っちゃあかんよ。すぐ大人の人に知らせるのだよ。」

「うん、ぼく走って逃げちゃうよ。」

「一人だけで帰っちゃいかんよ。みんなでいっしょに帰るだよ。」

「ぼく、正ちゃんといつもいっしょに帰る。」

こんなふうな話を聞いてくれるときはいいですが、中には、ころんで泣きだす子もいます。けんかをしながら歩いて、列をはみ出す子もいます。班長さんも苦労があります。そういう子を班長さんはなだめたり、すかしたりして学校へ連れてきます。それでも、毎日世話をしていると、よく並べるようになり、じょうずに歩くことができるようになります。



6年 藤原 真弓

その二 バトンタッチ

そして一年間、六年生は新しい班長さんにバトンタッチして卒業していきます。

Ｔ子さんも小学校を卒業して、班長さんの役目も終わりました。でも「新しい班長さんで、みんな言うことを聞いてくれるかな。けんかをしている子はいないかな。忘れ物をしてペソをかいている子はいないかな。」と、気がかりです。

そこで、四月三日、入学式の日。Ｔ子さんは、集会場所までそっと見に行くことにしました。自分も班長で苦勞したので、新しい班長さんの気持ちがよく分かります。

七時二十分。もうみんなはなわとびやおにごっこをして遊んでいます。

七時三十分。「集まってー」と班長さんの声。「ハイ」と、みんなすぐに集まりました。やれやれです。

Ｔ子さんは「ああよかった。これで一安心。あれなら、きっと上手に並んで、安全に学校まで行ってくれるだろう。」と思いました。

でも、一日だけでは分かりません。次の日も、そっと見に行きました。やっぱりちゃんと集まって、仲良く出発して行ききました。Ｔ子さんは、「これなら安心して班長の仕事をバトンタッチできる」と思って、うれしくなりました。

(Ｔ子さんとは平沢多映子さんのことです。)

その三 班長さんに聞く

新しい通学班の班長さんにインタビューしてみました。まず、中野篤憲君(若松新町)。

「並んできて、校門を入るとすぐに走って行ってしまふ子があるので困ります。だから、手を離さないようにつかんでいます。」

「歩きながら、一年生の子とクイズをやってきます。肉とネギとどうやって何ができるでしょう、という食べ物クイズ(答え・すきやき)」

「ふしぎなポケットから、すごい道具を出す人はだれでしょう。(答え・ドラエモン) こういうのは小さい子が喜んでくれます。それから、小さい子は自分で考えた歌なんか歌うからおもしろいです。」

次に、厩福玲子さん(若松東)。いつも、加奈子ちゃんの手を引いてきてくれます。

「あのね、玲子ちゃんってすごくえらいよ。一年生の子の歩くペースに合わせて、ゆっくり歩いてくるよ。」

「男子の班より、ちゃんと並んでくれるよ。『おはようございます』の声は、みんなとっても大きいよ。あとは小さいけど。」

と、玲子さんも自分の班のことをよく見えています。

伊奈直樹君(上地五区)にも聞きました。

「七時三十分」並べーって言う。すぐに並んでくれるとうれしいけど、並ばん時ははかっておくよ。三十五分に出発するけど大体並んでくれる。あいさつがよく言える子もたくさんおるけど、言えん子も少しおる。あとから、『大きい声で言ったか?』ちゃんと見えよ』って注意してやる。一年生のペースに合わせて歩くようにしてやる。」

松井親司君(上地四区)はどうでしょう。

「かずくん、並べよ』と言うと、かずくんはすぐ並んでくれるでいい。ほかにも、すぐに並べる子もおるし、遅い子も下ります。一年生の子は、ずっと手をつないでないと危ない。五年生のこと口げんかみたいになっただけ、今は仲直りしたよ。」

みんなが大きい声で『おはよう』って言えるときは気持ちがいい。「
どの子も班長さんとしてがんばっています。」

子供たちを見送るお母さんたちはどうでしょう。

「行ってらっしゃい。」

と、大きな声でニコニコしながら手を振ってくれるお母さん。

カーテンの隙間から、そっと見送るおかあさん。

いろいろですが、わが子がみんなと仲良く登校して、一日じっかり
勉強してきてほしいという願いは同じです。

「このごろ、おはようっていうあいさつ、よくできるじゃない。」

「あいさつをしてくれない子もいますよ、奥さん。」

「そりゃいるけど、そういう子には、『こちらから』おはよう『って
声をかけてやると、次からちゃんとやってくれるわよ。』」

「えらいつ。さすが奥様ー」

「いやですよ、冷やかしちゃ。オホホホ・・・。」

「ごめんなさい。わたしもやってみるわ。オホホホ・・・。」

さわやかな朝の空気の中に、笑い声が広がって行きます。先輩や

お母さんたちの温かい声を背にして、子供たちは学校へ向かいます。

二、うれしい話題二つ

その一 「九州からのはがき」

五月のさわやかな風に乗って、一通の葉書がはるばる南国九州から舞い込みました。差出人の住所は書いてありませんが、
消印は「大分・国見」と署名がありました。でも、この方については、だれも心当たりがありません。

全文を紹介します。

青葉の候、新学期を迎え諸先生方、児童教育に日々ご努力されて居られるお様子を拝見し、
頭の下がる思いで、へんをとった次第です。と申すのも、先般学校横の道を歩いてみると、
兎が二匹十手で草を食べているのです。学校で飼っている兎だな、次の日も居るではありま
せんか。のどかな風景に心の安らぎを、ついに校庭に、そして飼育場へ、子どもたちの明る
い挨拶を受けながら、チャボ・山羊がとても嬉しく思いました。情操教育の一端を見る事が
出来、先生方、校長さんの教育方針に敬服致しました。兎がいつまでも自然の中で遊び、人
の心を温めてくれる日々を祈り、明るい子どもたちの成長に心うたれた次第です。「力いっ
ぱい」「いい事ですね。ありがとうございます。先生方へよろしくお伝え下さいませ。」

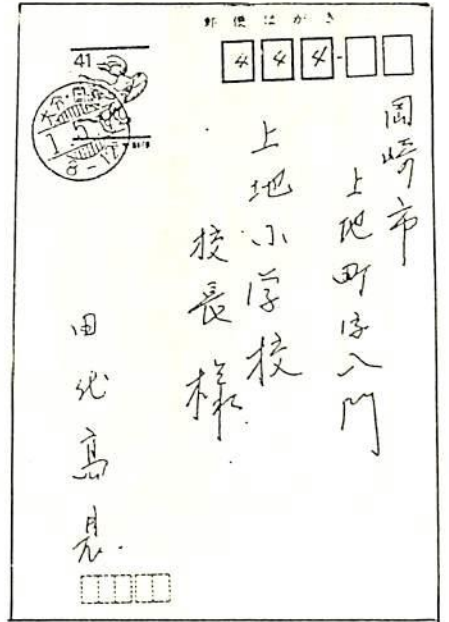


6年 藤原 真弓

この方は、学校近くに親せきがあったのでしょうか。学校の「ふれあい牧場」を、こんな温かい目で見ていただけるなんて、思ってもみないことでした。そして、子どもたちがこの知らないお客さんに、いつものように「明るい挨拶」をしてくれたのです。それで、わざわざ九州へ帰ってから葉書を書いて送ってくださったのです。

子どもたちの「明るい挨拶」がこのおじさんの心を動かし、ペンを動かすことになったのでしょうか。

それにしても、兎は天気の良い日、たいくつするど時々散歩にでかけるようですね。



九州からの手紙

昔葉の頃新学期を迎え派先生方児童園教育に日々
の努力をこらえ居るお様子を見たり下がるおふいで
ペンとさつた次で申すも先般三校橋の道
王角いそますと免かこ正士牛で早王合わて居るの
です学校で飼てる兎の存次つのも次つ日も居るで
可あがせんかの風情にいの安らまま、一校庭にもし
こ飼育場子も居るつ明るい挨拶と居れ下ろシキ
山羊かとも特しく思いりし情採取育カ一坊
そ是る和分出小生方校長この取育方針
に在座申す免かこ正士牛も自勉つゆり遊ん
心と思あこくる日々を祈り明るい存次つ日も居る
心うちんれめあつす、かこ正士牛も自勉つゆり遊ん
のりやう行法は、いそますと免かこ正士牛も自勉つゆり遊ん

その二 橋の夕名前は「にっしにっし橋」に決定

わずかにメートルばかりの「ミニ橋」。でも、橋は橋。

国旗掲揚塔のまわりに、みんなが楽しみにしていた池ができ、橋もかかることになりました。いくら小さくても、名前がなくてはおかしいということで、募集したら、何と六五〇点の応募がありました。

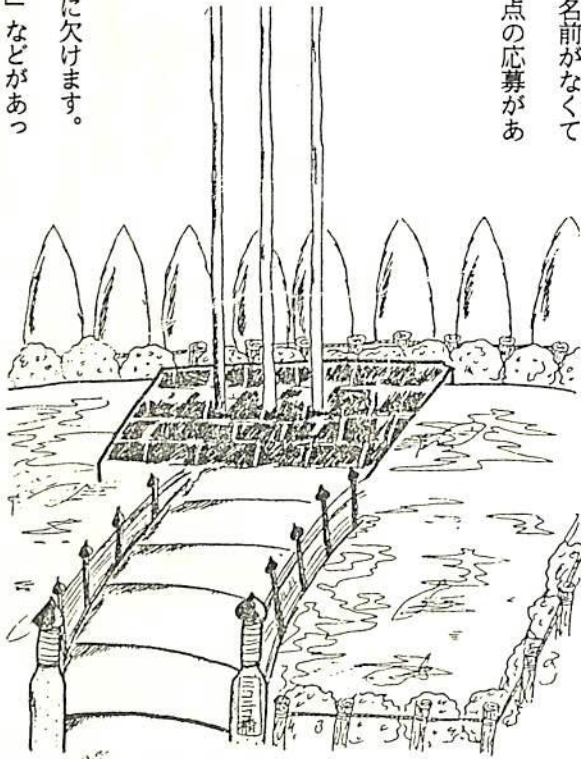
- 上地橋 一八一人
- 上地っ子橋 八六人
- ふれあい橋 四三人
- なかよし橋 四一人
- 力いっばい橋 二六人

これが数の上からみたベスト五です。

「上地橋」は悪くないけれど、ちょっとおもしろ味に欠けます。

「ふれあい橋」は「ふれあい牧場」「ふれあい農園」などがあって、少しくどく感じます。

「なかよし橋」はとてもいいですが、「愛知子どもの国」に同じ名前があります。



6年 横井英里子

「力いっぱい橋」は長すぎて呼びにくい。

そこで、数に関係なく次のものを選びました。

- | | |
|-----------------|------------------|
| 第一位 「にこにこ橋」 | 一の二 さきべみか |
| | 二の二 森 まゆみ |
| 第二位 「なかよし橋」 | 一の二 すぎうらはじめ 初め四人 |
| 第三位 「るんるん橋」 | 五の四 沢田 実佳 |
| 第四位 「レインボーブリッジ」 | 六の一 三谷 知世 |
| | 六の三 宝珠山由香 |
| 第五位 「希望橋」 | 四の二 田中 博 初め六人 |
| 第六位 「出会い橋」 | 六の二 鶴見 栄介 初め四人 |

このベスト六に入った人には賞品を渡しました。

また、このほか、応募者全員の中から、抽選で五十名の人にも賞品を上げました。

抽選は、六年生の小浜範芳君と臼井真弓さんに代表してもらい、職員室で公開抽選しました。

第一位「にこにこ橋」とつけてくれた、さきべさん、森さんありがとう。

橋というものは、そこにあると、だれでも渡りたくなるものだそうです。

この橋を渡ると、きっとだれでも「にこにこ」するでしょう。

三、待望の校舎増築始まる

「プレハブ教室のいごち、どう？」

と、子供たちに聞いてみました。

「運動場に近いでいいよ。」

「とっても明るいよ。」

子供たちは、けっこう気に入っているようです。最近のプレハブ教室は、昔と違って住み易くなっていますが・・・本校は六年前の開校時に五八〇名だった児童数が、現在九二五名にふくれ上がっています。そのため、第二音楽室や視聴覚室を普通教室に改造したり、プレハブ教室を急造したりしてしのいできました。そこで、今度いよいよ増築していただけることになりました。南舎西側へ普通教室六教室と、プール南側へ特別教室二教室（家庭科室、図工室）が、今年十二月にでき上がるのです。

六月二十六日に起工式が終わると、本格的な工事が始まるのです。ご来校いただく方にはそれまでご不便をおかけしますが、よろしく願っています。



校舎増築場所



6年 佐藤 一馬

四、調べる子供たち

三年生の子供たちが、メモ帳片手に「学区の商店街調べ」に行きました。

「先生、店もあるけど空き地もたくさんあるね。」

「そうです。これから家や店がどんどんできますよ。」

「どんな店ができるの？」

「さあ、それは分かりませんね。」

「おもちゃ屋ができるといいなあ。」

「わたしは、花屋さんができるといい。」

子供たちの話はずみずみ。そこで「空き地へ自分の店を作ろう」ということになりました。

でも、簡単にはいきません。どこへ、どんな店を作るか、よくはやる店にするにはどうしたらよいか、考えなくてはなりません。

そこで、次のことを調べました。

- ① 学区のどこに、どんな店があるか。
- ② スーパー「ドミール」のひみつは何か。
- ③ 二四八号線ぞいの店はどうなっているか。

疑問がいつぱい出てきたので、インタビューに出かけました。

・二四八号線ぞいにあるお店に行つて、インタビューすることになりました。先生が前の日に、三時から六時まで三時間も電話をかけてたのんでくれたそうです。(中略)一番さいしょは「すし友」さんです。初めてなので、お店の中へ入る時はとてもドキドキしました。(中略)

みんなで声をそろえて「おはようございます。上地小の三年三組です。」と言って、先生がかいてくれた紙をわたしました。(中略)

カレーハウスで聞いた中で、よくおぼえているのは、夏でも冬でもようふうが半そでだから、冬はさむくていやだけど、夏はすずしくていいということです。

聞きおわったら

「ありがとうございます。」

といつてかえりました。はじめてのインタビュー、とっても楽しかったです。(二)三の三 宝殊山 由香

礼儀正しい子供たちに感心させられますね。いよいよ、実践報告会(研究会)の公開授業です。子供たちも真剣です。

先生が「二四八号線ぞいで一ばん多い店は？」と言つたので、ぼくはかんだんだと思いました。そして手をあげました。そしたら、「林君」と言つたので、ぼくは「食べ物やさんです。どうですか。」と言つて、みんなが「さんせい」と言つたので、ぼくはあんしんしました。

それから、ラジカセでドミールの人の話を聞きました。

また、こういうけんきゅう会みたいな、先生たちがくる会をやつてほしいです。社会のけんきょうもすきになつてきました。こんどはどういうけんきょうをやるのかたのしみです。(二)三の三 林 拓司

次はどんな勉強に挑戦するのでしょうか。楽しみです。

五、励ましあう子供たち

実践報告会の研究授業で、四年一組では図工で、友達のかいた絵について話し合いました。教室へ入ると、まず子供たちの迫力ある絵に驚かされました。そして、四年生とは思えないほどの確に絵の鑑賞をしているのに感心しました。

今日五時間目に研究じゅ業があった。じゅ業参観にかんげいがないけど、一ばん気になったのは中原君のねつ。ほうかは海藤君とすかに教室にいた。でも、いろんなお客さんがいるから中原君もがんばった。

今日は大好きな図工をやった。何かはずかしい。私はろうかを見た時、今枝先生、青山先生、岩瀬先生、やぎの世話をした先生がいた。とてもうれしかった。ちゃんとやった。あんまりじょうずにできなかった。

でも、だいじょうぶだ。みんなもがんばっているんだもんね。

(四の一 青木 絵梨子)

だいじな公開授業に、友達の熱のことを一番心配してくれるやさしさ。こんな学級の中で子供たちは励ましあって生き生きと学習を進めます。

「あ、お母さんだ。ぼくの絵を見ていてくれるかな。あっ、あっちむいちゃった。」

じゅ業中なのにこんなことを考えてしまった。このじゅ業では、友だちの絵のかんしょうをした。

「ここがくふうしていろいろな色を使ってあるね。」

「このところが一しよの色にならないようにこげ茶色……。」

と、友だちの絵のかんしょうをしていました。みんながぼくのことを言ってくれた時はうれしかった。

「友だちの絵のかんしょう」ではげましてくることはいいことばです。(四の一 堂園 秀樹)

六、「なかよし池」からのレポート

七月三日、なかよし池ができたお祝いの会です。雨が降ったので体育館で行ないました。

贈っていたいただいた上地区画整理組合の加藤利吉さん、畔柳八百吉さんはじめ、市役所の開発室長大野隆さん、そのほか大ぜいのお客さんが来てくださいました。

上地っ子を代表して、六年の渡部亮介君がお礼のことばを言ってくれました。さすが代表だけあって、態度もキビキビと、大きな声でしっかりできましたね。

お礼のことば

にここ橋となかよし池が完成しました。

池の工事が始まってから今日の日が、待ち切れない感じでした。

工事をやっているおじさんたちは、工事中でも明るく声をかけてくれて、しんげんにぼくたちのために、池や橋をつくってくれる様子がよく分かりました。

ぼくたちは、工事をやっている間に、橋の名前、池の名前を考え、それを応募しました。自分たちで名前を考えるなんて、今までになかったことです。

そして、『上地小にとってもあっている』に『ここ橋』と『なかよし池』というこの名前が大好きです。

また、上地小にもう一つ新しいシンボルができ、より学校が明るくなったようです。

これから、この池や橋を上地っ子らしく使っていきたいと思えます。そして、後はいにきれいなまま残せるようにしたいです。

平成元年七月三日

六年 渡部 亮介

最後に、喜びの気持ちを鼓笛・バトンで表わしました。「マーチングマーチ・史上最大の作戦・気球に乗ってどこまでも」の三曲が、体育館いっぱいにひびきました。鼓笛部・バトン部の子が日ごろの練習の成果を発揮してみごとな演奏をしてくれましたね。

さあ、いよいよ池の入り口でテープカット。

いつのまにか雨は上がっていました。

こんどは「放魚」（さかなを放すこと）です。後藤文夫さんが七十センチもあるような大きなコイを持ってきてくれました。学区の広田川で釣ったのだそうです。

「わあー、すごい。」

「大きいなあ。」

飼育係の松田幸久君たちが池へ入れてやりますと、コイはうれしそうにゆうゆうと泳ぎ出しました。フナも何びきか入れました。おたまじゃくし、カメなど、もう「お先にしつれい。」という顔で、前から入っています。

カメなんか三十センチもあるくらい大きいのです。そういえば二年生の宇野紘生君たちが「浦島二世」と名前をつけてかわ

いがっていました。

三日ばかりたって、四年生の飼育係の山本陽平君たちに聞いてみました。

「長坂先生にえさをもらってね。二十分放課にやるんだよ。コイ、フナ、カメなんかがよく食うよ。」

「ときどきカメが顔を出すのがおもしろいよ。カメに一ばん人気があるよ。」

「コイも人気がある。コイは泳ぎ方がうまいよ。」

「カメがたまごを産んだよ。十二個もあったよ。みんなかえるといいなあ。」

渡部君のいうように「上地小の新しいシンボル」は、毎日大にぎわいです。「なかよし池」ですから、魚となかよしになります。また友だちどうしなかよしになれる池ですね。

今年、実践報告会、校舎増築起工式、なかよし池完成、バレ―部県大会優勝と、おめでたいことがぞくぞくとありますね。どれも上地っ子一人ひとりが「力いっぱい」やっているから出来たのです。



(なかよし池のテープカット)

七、コイもカメも元気です

四十日間の夏休みも、あつというまに終わってしまいました。

「もう一週間くらい休みがあったら・・・。」という方も「早く学校が始まってくれたほうがいい。兄弟げんかばかりしているから・・・。」という方もあります。

さて、保護者の方には、大変暑い中を、プール当番、水かけ当番、学区補導、各種大会の応援などやっていたいただきありがとうございました。おかげですばらしい成果を上げ、有意義な夏休みになったことを深く感謝しております。中でも、バレーボール全国大会の募金につきましては、たくさんの浄財を頂きありがとうございました。戸別に募金に回って頂いた役員さんや委員さんのご苦勞に対し、厚くお礼申し上げます。また、快くご援助下さいました方々、本当にありがとうございました。

学区外の方々からも「上地小のファンです。全国大会がんばってください。」と、ご奉仕を頂きました。また、匿名の封筒で「お役に立てて下さい。」と届けて下さった方も大勢おられ、学校を支えて下さるご厚意に、幾度か胸の熱くなる思いがしました。

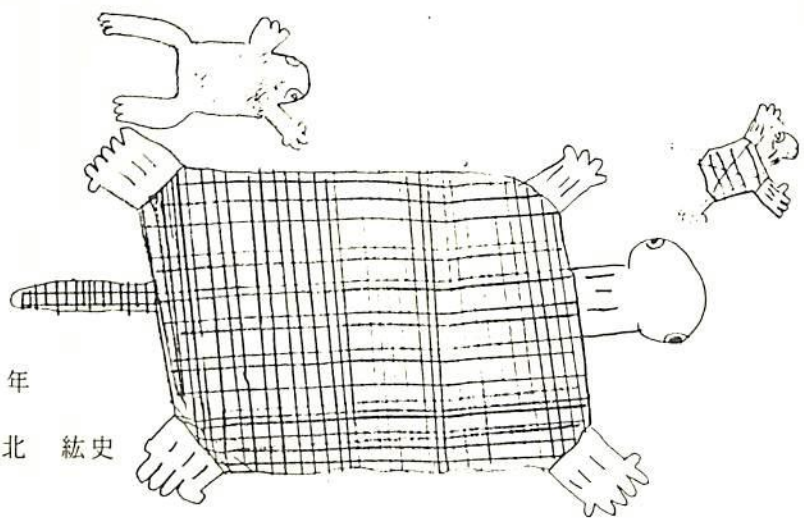
おかげで本来の目的もほぼ達成し、経済的にも余裕が出てまいりましたので、この資金をもっと多くの子供たちのために役立たせるよう、成瀬総代会長さん、柴田社教委員長さん、近藤PTA会長さん、スポーツ少年団代表夏目さ

んのご協議をお願いしました。そこで、一部は来年への積立金、残りを部活動助成金として有益に活用させて頂くことになり、大変喜んでおります。

九月一日、十一名の転入生を迎え、九百二十二名で二学期を迎えました。休みが終ってみると、どの子も一回り大きくたくましくなっています。よく成長する子は、身長で一センチ以上、体重で一キログラム以上増えています。学校のなかよし池のコイやカメも、一匹も死なずに、夏を越えました。七十センチもあるジャンボコイは、ゆうゆうと泳いでいます。カメは時々日光浴をしています。飼育係の子が、毎日えさをやるので、このごろは大分なれて、寄ってきて喜んで食べます。

学校へ来られたら、ぜひ見てください。

なお、校舎の増築工事で不便をおかけしていますが、大体順調にはかどっています。十一月の完成を楽しみにしててください。



2年

大北 紘史

八、内装工事はじまる

― 順調な校舎増築工事 ―

増築される校舎が日に日にでき上がっていきます。子供たちも、工事の様子を毎日楽しみにして見えています。

「できるのが早いなあ。」

「レッカー車ってすごいね。重いものをとっても高いところまでつり上げている。」

「鉄の棒や、木の板がたくさんいるだね。ゴミや木切れがいっぱい出るなあ。」

こんな感想をもっています。中には、

「おじさんたち大変だね。朝早くから夜おそくまで働いて。」

「それに高いところで仕事をするのであぶないね。」

など、働く人の苦勞を思う子もいます。生きた社会科の勉強になっています。

「先生、何年生が入るの？いつから入るの？」

「出来たら、プレハブこわしちゃうの？」

と、真剣に聞く子もいます。

六月十六日に起工式があり、その後雨のため一時仕事が遅れましたが、ほぼ順調に進んでいます。現在は型枠も取れ、アルミサッシの窓の取り付けや室内工事にかかっています。

特別教室（家庭科室・図工室）の正面には、河合友子先生、中嶋ゆかり先生がデザインした楽しい壁画が取り付けられるはずで、

ここで、工事関係者の声を聞いてみました。

○ 三幸建設さん（普通教室の工事）

「左官、土木職人さんが思うように集まらず、予定の仕事が進まなくて心配しています。児童の皆さんが一人も事故に巻き込まれないように、校舎内で車の運転などの安全に万全を期しています。」

○ 左官さん

「上地小の子供たちの挨拶のよさや、元気のよい姿に感激しています。」

○ 磯谷建設さん（特別教室の工事）

「職人不足から起きた工事の遅れもなんとか挽回し、今、ほっとしています。室内工事にかかったので、十月中にはほぼ全容が見せできると思います。上地小学校にご縁があつて仕事をさせてもらっているのです、できるだけことは協力します。」

学校としても、建設会社から工事用のグラインダーや水中ポンプをお借りしたりして、助かっています。運動会やおかさきつ子展の準備など、両者どちらも多少の不便はありますが、協力し合っておれば、事故もなく、仕事もはかどると思います。

最後に工事概要と工事記録をご紹介します。

九、心やさしき上地っ子

● その一 感謝集ム云

校舎がきれいにでき上がっていきます。それを見て子供たちから「工事のおじさんに感謝しよう。」という意見が出てきました。

そこで、十一月四日、集会委員の子が計画して、全校で感謝集会を行いました。

まず、拍手で監督の依田さん（磯谷建設）を迎えます。最初は六年の大滝貴司君と杉田ひとみさんのインタビューです。苦労話を目を輝かせて聞きました。

次に、四年生小浜悠美さんによる手作りの感謝状贈呈です。

あなたは上地小学校校舎ぞうちくのため、暑い日も寒い日も一生けんめいがんばって工事をつけてくださりありがとうございます。新校舎完成まで、病气やけがに気をつけてがんばってください。

平成元年十一月四日

上地小学校

集会委員会

● 増築工事の概要

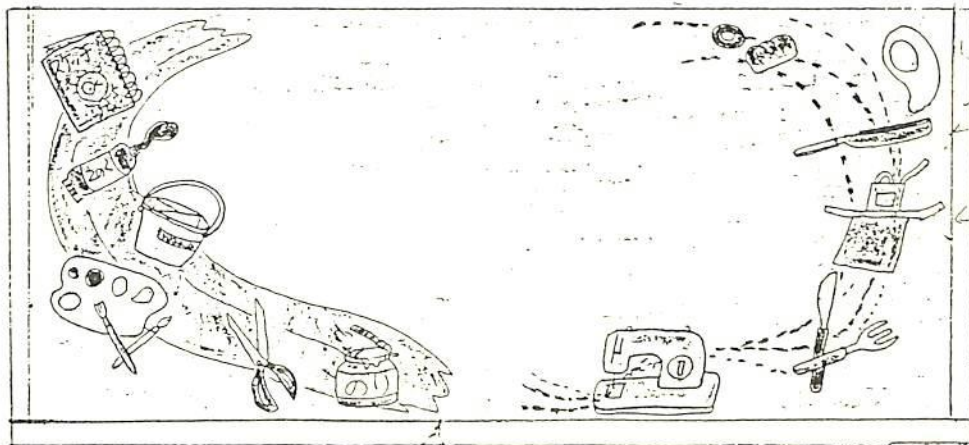
普通教室6室——鉄筋コンクリート造3階建て
三幸建設が63、860千円で請負い、平成元年12月15日完工を予定している。

特別教室2室——鉄筋コンクリート造平家建て
磯谷建設が51、500千円で請負い、平成元年11月20日完工を予定している。

● 増築工事の歩み

- 6月14日 両工事とも仮囲い始まる。
- 6月17日 ふれあい牧場の移転。
- 6月19日 小鳥小屋の移転。
- 6月20日 工事従事者用ハウスと簡易トイレ設置。
- 6月21日 百葉箱を体育館南に移転。
- 6月22日 地下8～12メートルに基礎パイルを打ち、掘削工事を開始。
- 7月12日 鉄筋組み・型枠組み開始。
- 8月12日 水道・電気工事開始。
- 8月21日 壁配筋工事開始。
- 9月 8日 梁配筋工事開始。
- 9月 9日 生コンクリート打ち開始。
- 9月26日 特別教室室内工事開始。

特別教室正面壁画



最後に、四年生の神谷美江さんより花束贈呈。

「長いことこういう仕事をやっていますが、「感謝集会」をやってももらったことは、初めてです。一生心に残るでしょう。ありがとうございます。」

と、依田さんもとても感謝してみえました。

(三幸建設の藪田監督さんにも、後から感謝状をお渡ししました。)

● その二 おかざきつ子展で

おかざきつ子展へ行きました。本部へ行くと、係の先生がこんな話を聞かせてくれました。

「上地小の子が迷子を見つけてくれてね。泣く子をじょうずにあやしながら、本部まで連れてきてくれたんですよ。よく氣のつくいい子がいますね。名前は聞かなかったけど・・・。」

学校へ帰って、さっそく名前を調べたら、三年一組の田中佑樹君でした。田中君、ありがとう。

まだあります。

六年生の高木繁宜君とたみお太郎君のことです。

「ぼくたちが幾日も苦勞して作った作品が痛んでいるといけない。」そう思って、日曜日の朝、直しに行ってくれたのです。先生にも言われたわけではありません。自主的に二人で相談して、接着剤でみんなが見に来る前に直してくれました。

この六年生のフィールドアスレチックの模型は、広い会場でも大変な人気でした。教科書会社の専門家の目に止まりました。全国で紹介しようということで、十四日にカメラマンが学校へ来て特別に写真を撮って行かれました。

十、ご好意に感謝します

● その一 おいしいカレーとさつま汁

学校では総代会会長成瀬司さんの畑をお借りしています。ここで二年生がアブラナを作って、理科の勉強をしました。

四年生は、ジャガイモ、サツマイモなどを作りました。

汗を出して畑を耕し、暑い中雑草を取り、やっと収穫できました。

そこで、「大谷公園で収穫祭をしよう」ということになりました。

ジャガイモを使って、カレー作りです。

煙が上がリ、いいにおいがただよいます。

「おいしい、おいしい。」と大好評でした。

今度は、「サツマ汁」作りです。これは、ほかの日に校庭で行いました。ワイワイ、ガヤガヤと大騒ぎ。

「はい、お代わり。」あつという間に平らげてしまいました。

こんな楽しい行事ができたので、成瀬さんに、四年生全員で御礼の手紙を書くことになりました。その一部を下の欄で紹介します。

成瀬総代会会長様

畑をかしてくれてありがとうございます。
そのおかげで、さつまじるが作れたりしています。

畑にたくさんさんのいもができて、クラスみんなはすごく喜んでいました。これからもたくさん育てて、勉強していきたいと思っています。
(四の一 志賀 愛子)

十一日、さつまじるを作りました。あのさつまじるはとくべつおいしかったです。あの場所をかしてくださったおかげです。どうもありがとうございます。
(四の一 吉村 浩一)

●その二 すばらしい「イタリア風景」

若松町石橋にお住まいの画家、丸井銑三さんから五十号の絵を寄贈していただきました。わざわざイタリアまで出かけてかいて下さったすばらしい風景画です。異国情緒たっぷりの、豊かな色彩、重量感、明暗、遠近など、子供たちはこの絵からたくさん勉強をすることができます。

開校当時にも「波切風景」という大作を寄贈していただきました。あわせて厚くお礼申し上げます。

すばらしい絵でした

丸井さんの絵を初めて見て、あっと思ったことがある。僕では絶対できないような色の組み合わせ。一つだけの所だけに二十色ぐらい使っていらっしやる。僕ではそんなことやっても、色がごちゃごちゃになり、完成はきたない絵になってしまう。だけど、丸井さんは、色の工夫や、見る人でもどういふ建物かがはっきりと分かります。

丸井さんは、イタリアまで絵をかきにお行きになった。僕は、イタリアという国は名前だけは知っていたがどこにあるか分からなかった。地図帳で探したら長靴のような形をしていて、首都はローマということが・・・。丸井さんが絵を寄付して下さらなかつたら、イタリアのことなんか分からなかつたし、外国のことだって調べようとしなかつたと思います。

丸井さんの絵のおかげで、☆色の工夫（つけかた） ☆立体の付け方 ☆見ているものに、目の視線をなしてはいけないこと ☆見る人がその絵の中に入れるほど、気持ちをこめてかくこと など大事なことがよく分かりました。ありがとうございました。

（五の一 花田 康仁）

十一、音のプレゼント

去年の十二月二十四日のことです。前教頭柴田先生のお宅へ、一個のカセットテープが送られてきました。差出人は、若松東の平沢多映子さん（中一）とそのご一家です。

実は、平沢多映子さんは、一年前、柴田教頭先生のお別れ式に、児童代表で「お別れのことば」を読んだのです。平沢さんたちは、「奥様（早苗様）がきつとさびしがっておられるだろう」と思って、時折、手紙や電話で慰めたり励ましたりしてあげていたのです。

この音のプレゼントの録音はこうでした。

柴田早苗様、メリークリスマス！

寒くなってきましたね。風邪を引かずにお元気ですか。今から、上地小学校の校歌を

多映子、友恵、広大の三人で歌います。聞いて下さい。（多映子さんの声）

若松台に日が昇り

ひばりも歌う青い空

けやきの芽吹く校庭に

・・・（お母さんの声も入っている）

——以下略——

元気のよい、明るい歌声が飛び出してきました。にこにこした顔まで想像できる声でした。

次は、一人ひとりのメッセージです。

・来年は三年生になります。学校を休まずに元気に行きます。（広大）

・私は来年、五年生になります。合唱部でいい声を出します。たくさん歌をおぼえます。高学年になるから、小さい子をかかわります。（友恵）

私は早くも中学一年生も終わろうとしています。(中略)私は、ギスギスした中学二年生はやりたくない。親に心配をかけることもあるかも知れないけれど、限度を守って普通じゃない二年生をやりたいと思います。(多映子)

・友恵や広大をよく見ています。背すじを伸ばしてがんばってください。(母)

こんどは、父も大好きな高石ともやさんの「私の子供たちへ」を家族五人で歌います。

生きている鳥たちが

生きて飛びまわる空を

あなたに残しておいてやれるだろうか、父さんは、

目を閉じてごらんなさい

山が見えるでしょ

近づいてごらんなさい

こぶしの花があるでしょ (二、三番略)

では、早苗さん、これから寒くなります。がんばってください。終わります。

ほのほのとしたファミリコーラスが響く。家族全員で合唱できるなんて、なんとすばらしいことでしょう。

一月になって、学芸会が近づきました。元気な上地っ子の発表ぶりをぜひ見てもらいたいと、平沢兄弟で手製のプログラムと案内状を出しました。

多映子さん以外は、まだ顔を知りません。学芸会の当日、教頭先生のお世話で、柴田早苗さんと平沢さん一家は、感激の対面をして、積もる話に花を咲かせたのでした。

※ この学芸会から十日後、柴田早苗様は突然あの世へ旅立たれてしまいました。上地っ子にこやかな笑顔を残して。心よりご冥福をお祈りします。

十二、平成元年度十大ニュース

学校ができて七年目。ラッキーセブンの年にしたいと願ってきました。

保護者、学区の皆様のご支援のご協力と、素直で活力のある上地っ子のがんばりで、それにふさわしい、数々の成果を上げることができました。主なものを拾ってみました。

一、「真剣な勉強ぶり」

上地の子供たちの生き生きとした勉強ぶりを、大ぜいのお客さまに披露した「実践報告会」。「上地の子は明るい」「元気がいい」「真剣に勉強している」というおほめの言葉を、たくさんいただきました。「学級づくりを基盤とした学習指導」をテーマに実践報告会。(六月十三日)

二、「待望の校舎増築」

五百八十人を出発した本校も、今では九百三十人。特別教室を教室に転用していましたが、待望の校舎が増築。普通教室六、特別教室二。(起工式六月二十六日。完工式一月十日)

三、「なかよし池」「にこにこ橋」完成

区画整理組合の記念事業として寄贈していただきました。新しくできる「生活科」にも活用できます。コイもカメも楽しそうに泳いでいます。(七月三日)

四、「部活動の成績優秀」

女子バレー部優勝、サッカー、バスケット部準優勝。歯を食いしばって練習したおかげです。「継続は力なり」を体で覚え

ました。(七月二十六日)

五、「バレー部全国大会連続二年出場」

今年もベスト十六位進出。東京の駒沢体育館、北海道から九州まで、各県の選手と試合をしました。愛知県代表として燃えた四日間。(八月十五日)

六、「一人に一個のルーベ」

みんなルーベ(虫めがね)をもらってうれしそう。「ソニー教育資金」受賞 将来の科学者がたくさん出ることが期待されます。(十一月一日)

七、「勉強でも入賞続々」

入賞はスポーツだけではありません。統計グラフ、貯金箱、ポスター、習字、先生の教育論文、自作TPなど、続々と入賞しました。

八、「PTAの汗の結晶、総合遊具設置」

夢の遊具とでもいいますか。二年間資金を作ってくださって、中庭にできました。この遊具の愛称(ニックネーム)も子供たちから募集中。(三月十一日)

九、「学校だより上地」発行三年間

月刊継続発行三年を記録しました。学校と家庭のかけはし、保護者、学区、贈呈先の方の励ましが支えになっています。これからも感想などお寄せください。

十、「新しい家庭科室で給食試食会」

ピカピカの特別教室。好評でしたので来年度も企画します。ぜひご参加ください。(二月二十日)

三、教室の窓